

森 町

もり かわ
森 川 6 遺 跡

— 森インター線交付金工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成22年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



森川6遺跡調査状況

例 言

1. 本書は、森インター線交付金工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成22年度に発掘調査を実施した、茅部郡森町森川6遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（第277集）である。
2. 発掘調査と整理作業は第2調査部第3調査課が行った。
3. 本書の執筆は土肥研晶が担当した。
4. 遺物の分類は阿部明義・土肥がおこなった。
5. 分析・同定について、下記に依頼・委託した。
放射性炭素年代測定 株式会社加速器分析研究所
炭化種子同定 株式会社古環境研究所
昆虫 北海道開拓記念館 堀 繁久
6. 出土遺物は森町教育委員会が保管する。写真などの記録類は当センターが保管する。
7. 調査にあたっては、下記の諸機関および人々のご協力、ご助言をいただいた（順不同、敬称略）。

北海道教育庁生涯学習部文化・スポーツ課

森町教育委員会 沢口幸男、高橋 毅、本山志郎

NEXCO東日本 中村 明

厚沢部町教育委員会：石井淳平

木古内町教育委員会：木元 豊

北海道開拓記念館：右代啓視、鈴木琢也

北海道考古学研究所：横山英介

厚真町教育委員会：乾 哲也、奈良智法、荻野幸男、天方直章

鷺ノ木ストーンサークル研究会 夏坂幸彦

株式会社 河井工業

株式会社 泰功建設

三井住友建設株式会社

記号等の説明

1. 遺構は、畝状遺構のみであり、略式の記号は用いていない。畝状遺構には、畝方向が異なるものがあるが、全体で同じ遺構として扱い、グリッド番号で具体的な位置を示す。
2. 実測図、拓影図の縮尺は、原則として次のとおりで、スケールを付けてある。
畝状遺構平面図 1:500 遺構断面 1:40 耕作痕平面図・断面図 1:20
土器拓影図 1:2 剥片石器実測図 1:2 礫石器実測図 1:3
3. 掲載遺物の写真は縮尺を統一していない。
4. 遺構図中のレベルは標高(単位m)を示し、遺構ごとに方位記号を記している。
5. 本文中および表中で、遺構の規模は次の要領で計測値を示した(単位m)。
6. 土層の観察には『標準土色帖』(小山・竹原1967)および『土壤調査ハンドブック』(ペドロロジスト懇談会1984)を用いている。
7. セクション図に用いられている土層番号は以下のとおりである。

包含層

I [表土]

II [Ko-d] 灰黄褐色~にぶい黄褐色(10YR 6/2~5/3) 発砲した軽石が1.5~2m堆積する。上位は細砂、中位は細砂礫、下位は砂礫。

III 黒色(10YR2/1) しまり中、粘性やや強。

IV [B-Tm] にぶい黄褐色(10YR5/4) しまり弱。粒子非常に細かく密。

Va 黒色(10YR2/1) しまり中、粘性やや強。

Vb [Ko-g 混じり黒] 黒褐色(10YR2/2~2/3) しまりやや弱、粘性中。径1~5mmの軽石少量含む。

Vb上 [Ko-g <黒] 黒褐色(10YR2/2) しまり中、粘性中。径2mm以下の軽石少量含む。

Vb下 [Ko-g+黒] 黒褐色(10YR2/3) しまり中、粘性中。径2mm以下の軽石やや多量含む。

VI [Ko-g] 褐色(10YR4/6) しまり弱。径1mm以下で砂状、径5mm程度の軽石少量含む。

VI上 [Ko-g (赤)] 明褐色(7.5YR5/6) しまりなし。砂状、径2~5mmの軽石やや多く含む。

VI下 [Ko-g (白)] 明黄褐色(10YR6/6) 砂状、径2~5mmの軽石少量含む。

VII [粘質土] 暗褐色(10YR3/3) しまりやや強、粘性強。

VII① [粘土 (Ng)] にぶい黄褐色(10YR5/4) しまりやや強、粘性強。

VII② [粘土 (Ng)] にぶい黄褐色(10YR5/3) しまりやや強、粘性やや強。

※Ng…濁川カルデラ起源の火砕流堆積物(風化層)

畝状遺構土層(各断面図共通)

1 [III] 黒色(10YR2/1) しまりなし、フカフカ。均質的。

2 [III>IV] 黒色(10YR2/1)+褐色(7.5YR4/4) しまり弱。色調やや不均質。

3 [III+IV] 黒褐色(10YR3/2)+褐色(7.5YR4/4) しまりやや弱。色調やや不均質。

4 [III<IV] にぶい黄褐色(10YR4/3)+黒褐色(10YR3/2) しまりやや弱、サラサラ。色調やや不均質。

5 [III<IV] にぶい黄褐色(10YR4/3)+黒褐色(10YR3/2) しまり弱、サラサラ。色調均質的。

目 次

口 絵	
例 言	
記号等の説明	
目 次 挿図・表・図版	
I 調査の概要	
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査に至る経緯	1
4. 調査の方法	4
(1) 調査範囲とグリッドの設定	4
(2) 発掘調査の方法	5
(3) 土層	5
(4) 整理の方法	6
(5) 記録と保管	6
(6) 遺物の分類	6
5. 調査結果の概要	8
II 遺跡の立地と周辺の遺跡	9
1. 遺跡の位置と周辺の環境	9
2. 寛永の大噴火前後の森町と沿革史	9
3. 町内の遺跡	13
III 遺構	17
IV 遺物	31
V 自然科学的分析	37
1. 森川 6 遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	37
2. 森川 6 遺跡における種実同定	40
3. 森川 6 遺跡出土の昆虫遺体	46
VI まとめ	48
引用・参考文献	52
写真図版	53
挿図目次	
図 I - 1 遺跡位置図	2
図 I - 2 調査区位置図	3
図 I - 3 グリッド設定と調査範囲図	4
図 I - 4 土層模式図	5
図 II - 1 和入地の変化と箱館六ヶ場所	12
図 II - 2 森町の遺跡位置図	14
図 II - 3 III層上面の地形とVII層調査範囲	16
図III - 1 畝状遺構全体図と調査日程図	17

図Ⅲ-2	畝状遺構セクション図Ⅰ	19
図Ⅲ-3	畝状遺構セクション図Ⅱ	21
図Ⅲ-4	耕作痕位置図・畝状遺構上面（B-Tm逆転堆積）	23
図Ⅲ-5	耕作痕 1	24
図Ⅲ-6	耕作痕 2	25
図Ⅲ-7	耕作痕 3	26
図Ⅲ-8	耕作痕 4	27
図Ⅲ-9	耕作痕 5	28
図Ⅲ-10	耕作痕 6	29
図Ⅲ-11	耕作痕 7	30
図Ⅳ-1	包含層出土土器 1	32
図Ⅳ-2	包含層出土土器 2	33
図Ⅳ-3	包含層出土石器 1	34
図Ⅳ-4	包含層出土土器 2	35
図Ⅵ-1	森町内検出の畑跡	49
図Ⅵ-2	森川 6 遺跡付近の畑跡	50

表目次

表Ⅰ-1	出土土器一覧	8
表Ⅰ-2	出土石器一覧	8
表Ⅱ-1	森町の遺跡一覧	15
表Ⅳ-1	掲載土器一覧	36
表Ⅳ-2	掲載石器一覧	36

図版目次

図版 1	調査前の状況 表土除去開始	図版 8	⑥地区西側耕作痕 ⑦地区畝状遺構
図版 2	表土除去後の状況 発掘調査開始	図版 9	⑦地区測量写真 ⑦地区耕作痕測量写真
図版 3	調査状況遠景 畝状遺構検出状況	図版10	基本土層断面 畝状遺構セクション（3ライン西側）
図版 4	畝状遺構検出状況②地区 畝状遺構調査状況	図版11	土器出土状況（縄文時代晩期） 石斧出土状況 石皿出土状況
図版 5	包含層調査 畝状遺構③地区	図版12	包含層出土の土器 1 包含層出土の土器 2
図版 6	④地区畝間検出状況 畝状遺構④地区	図版13	包含層出土の石器 1 包含層出土の石器 2 包含層出土の石器 3
図版 7	⑤地区表土除去 畝状遺構検出状況⑥地区		

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名：森インター線交付金工事埋蔵文化財発掘調査
 委託者：渡島総合振興局
 遺跡名：森川6遺跡（北海道教育委員会登録番号B-14-52）
 所在地：茅部郡森町字森川町302-1・22・26・317-5番地ほか
 調査面積：1,800㎡
 発掘期間：平成22年7月12日～平成22年10月19日
 整理期間：平成22年10月20日～平成23年3月31日

2. 調査体制

理事長	坂本均	第2調査部長	西田茂
専務理事	松本昭一	第3調査課長	村田大
常務理事	畑宏明	主査	土肥研晶（発掘担当者）
		主査	阿部明義（発掘担当者）

3. 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は、函館を起点として室蘭・苫小牧・札幌・旭川を經由し、名寄にいたる総延長488kmの路線であり、剣淵町土別剣淵IC～八雲町落部IC間の413.6kmはすでに供用されている。現在、森町～七飯町間の建設工事が進められており、森インターも平成23年度の供用開始を予定している。

森インターと国道278号をつなぐ森インター線局改工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成14年、函館土木現業所から北海道教育委員会に事前協議がなされた。これを受け北海道教育委員会は同年5月14日～16日にかけて試掘を実施した。その結果、調査区内で堅穴住居らしき落ち込みを確認、遺物も出土していることから、付近は発掘調査が必要と判断した。このとき道路予定地の隣接地は未買収地や保安林であるため、発掘調査範囲の確定には至らず、判断保留とした。

平成21年、渡島支庁長より地方特定道路整備事業道道森インター線公安工事の協議がなされた。これを受けた北海道教育委員会は、同年6月4日保安林南側の区域で試掘調査を実施、遺跡は無いと判断する。同年8月18日、もと保安林区域で試掘を実施し、3ヵ所の試掘坑から、遺物や遺構らしき落ち込みを確認した。この結果、本地域の1,397㎡が事前の発掘調査が必要と判断される。

試掘調査未了区域が約400㎡残っていたが、平成14年度に判断保留とした区域と合わせ（仮称）森川6遺跡は2,060㎡が発掘調査の対象となり、平成22年7月12日より財北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。同年7月22日、残っていた試掘調査未了区域で北海道教育委員会による試掘が行われた。遺物包含層は無いと判断されたが、隣接地の発掘調査で畝状遺構が検出され、400㎡の追加となった。最終的な発掘調査範囲の面積は、道路工事計画の変更と法面保護のための面積減少、増加区域などがあり1,800㎡となった。

森町森川6遺跡

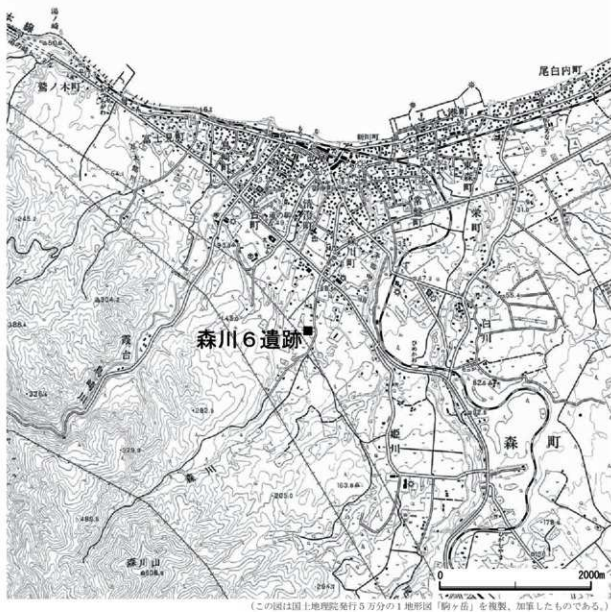
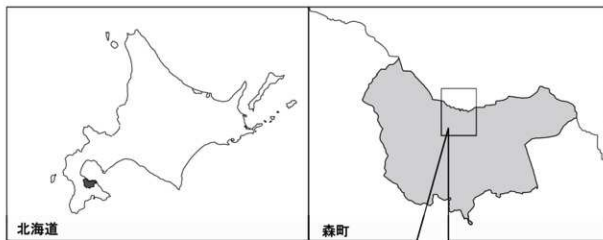


図 I-1 遺跡位置図

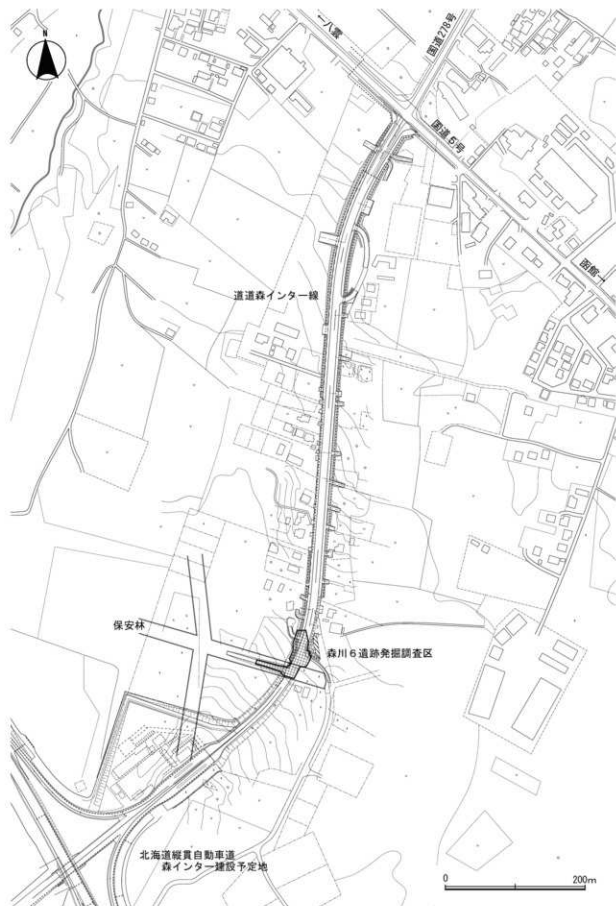


図 I-2 調査区位置図

4. 調査の方法

(1) 調査範囲とグリッドの設定

森川6遺跡の調査区設定に当たっては、北海道函館土木現業所が平成20年に作成した「森インター線平面図 1000分の1」を使用した。調査予定区の北境が道路予定地と直交し、設計図上の道路幅が法尻間で20mであることから、この線を基準とし、4m毎にM7～R7までを設定し、これを軸心に4×4mのメッシュを調査区に重ねた。

なお、調査区より北側の約400mについては試掘未了区域であり、後に拡張の可能性があるため、北

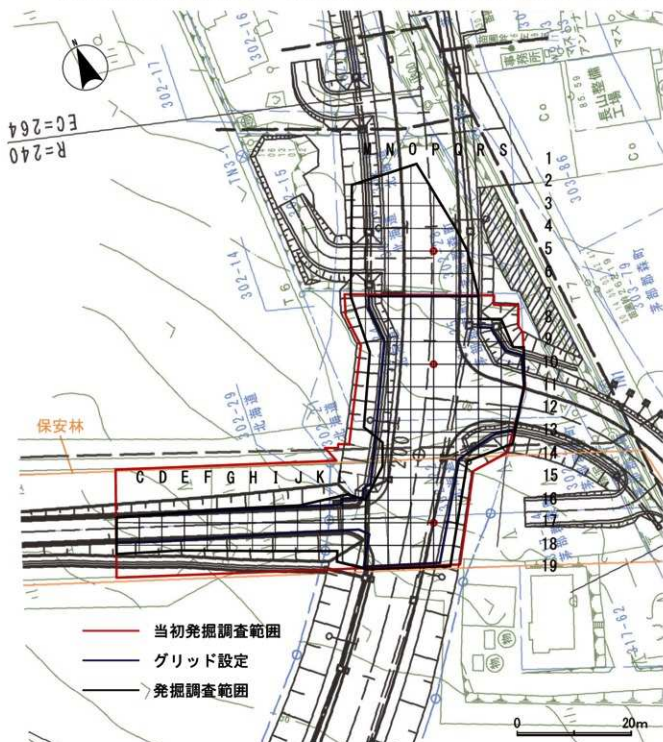


図1-3 グリッド設定と調査範囲図

方向に余裕を持たせ7ラインとした。調査区の形状は、計画段階では、道路の法尻で設定したため、本調査での最終的な調査区はこれより広がるものとなった。

測量の成果で得られた世界測地系に基づく平面直角座標は第X I系で次のとおりである。

P 5 : X = -212513.152 Y = 26930.103

P 1 0 : X = -212532.030 Y = 26923.497

P 1 7 : X = -212558.459 Y = 26914.250

(2) 発掘調査の方法

調査区内の表土中には農業用の送水管が埋設されており、この移設工事終了後に発掘調査開始の予定であった。しかし、送水管の移設工事が予定通りに進まなかったことと、その他諸事情も重なり、発掘調査を進めるなか送水管の切り替えをおこなうこととなり、結果として調査区を8分割し発掘を進めた。また近世の畑跡が調査区内に広く検出されたことから、調査は次の手順でおこなった。

まず、調査に先行し重機により表土I層と火山灰(駒ヶ岳火山灰d層)II層の除去をおこなった。火山灰は約2mの厚さで堆積しており、遺物包含層の大半は良好に残存していた。

包含層調査

III層は畝状遺構(畑跡)が検出される可能性があるため、まずII層の火山灰を数センチ残した状態からジョレンで上面を検出し、畑の畝が残っているか確認し地形測量をおこなった。その後ジョレンや移植ゴテを用い10世紀中頃の火山灰であるIV層面前後まで掘り下げ、畑の痕跡の有無を確認する。無かった場合は縄文時代の包含層であるV層を移植ゴテやスコップを用いてVI層(駒ヶ岳火山灰g層)面まで掘り下げた。VI層上面の地形を測量したのち、調査面積の1割にあたる180㎡で縄文時代早期の包含層であるVII層を移植ゴテやスコップを用いて調査した。

包含層から出土した遺物はグリッド、層位ごとに取り上げた。

遺構調査

畑跡が確認された場合、まず畝間を写真測量した。調査当初は畝間を掘り形状を検出しようとしたが、耕作深度が浅く、耕作痕も壊しているとみられたため、調査後半からは耕作痕の検出に重点を置いた。畝間の測量の後、ジョレンや移植ゴテで農具の痕跡が単体で独立する深度まで丁寧に掘り下げ、検出された耕作痕の平面測量と一部の断面測量をおこなった。

(3) 土層

基本土層はI層からVIII層に分層した。

I層：表土

II層：駒ヶ岳火山灰d層(Ko-d、1640年降下の軽石層の堆積層厚1.5~2m 上位は細砂、中位は細砂礫、下位は砂礫)

III層：黒色土

IV層：白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm、10世紀中頃降下)、

Va層：黒色土

Vb層：Ko-g混じり黒褐色土層

含まれる軽石の量で、上位層と下位層に分層

VI層：駒ヶ岳火山灰g層(Ko-g、約6000年前降下層)

土色と含まれる軽石の粒径から上位と下位に分けた)

VII層：暗褐色粘質土

VIII層：ぶい黄褐色土層(濁川カルデラ起源の火砕流堆積物層)

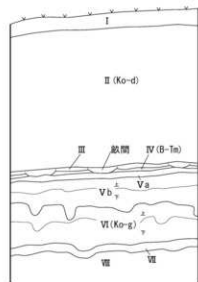


図 I - 4 土層模式図

(4) 整理の方法

取り上げた遺物は、現地では原則として以下の作業工程で整理を行った。遺構・包含層それぞれの「遺物取り上げ台帳」、および「土壌水洗サンプル取り上げ台帳」を作成し、これをもとに水洗、乾燥、分類、注記、点数集計等の作業を進めた。注記の内容は、森川6遺跡を「MK6」と略記し、その後グリッド名、層位の順に記した。注記するスペースのない、小さな遺物については省略した。

遺物の出土グリッド、層位、点数、分類名、日付などの情報は「遺物カード」に記録し、遺物とともにビニール袋へ入れ、収納した。カードの情報は遺構ごと、分類ごとの情報を集計し、最終的な遺物台帳を作成した。

(5) 記録と保管

現地での実測図・土器・石器などの実測図、写真などの記録は当センターにおいて保管する。遺物は報告書刊行の後、森町教育委員会が保管予定である。

(6) 遺物の分類

土器

土器は大きな区分である時期ごとの特徴から、便宜的に縄文時代早期に属する資料をI群とし、以下順に前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群、続縄文時代をVI群、擦文時代相当のものをVII群、とし、各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半(a類)、後半(b類)、あるいは前葉(a類)、中葉(b類)、後葉(c類)に分類した。また、必要に応じて細分類(例 a-1類など)を行っている。

I群 縄文時代早期に属する土器群

- a類：貝殻条痕文、貝殻腹縁文、などが施されるもの
- b類：燃糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文、貼付文、縄文等の施されるもの
 - b-1類：東銅路II・III式に相当するもの
 - b-2類：コックロ式に相当するもの
 - b-3類：中茶路式に相当するもの
 - b-4類：東銅路IV式に相当するもの

II群 縄文時代前期に属する土器群

- a類：縄文の施された丸底・尖底を特色とするもの。春日町式など
- b類：円筒土器下層式に相当するもの

III群 縄文時代中期に属する土器群

- a類：円筒土器上層式に相当するもの
- b類：円筒土器上層式に後続する土器群で見晴町式・榎林式・大安在B式・ノダップII式・煉瓦台式に相当するもの

IV群 縄文時代後期に属する土器群

- a類：初頭～前葉の土器。天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津VII群・白坂3式に相当するもの
- b類：中葉の土器。ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式併行に相当するもの
- c類：後葉の土器。堂林式・三ツ谷式・湯の里3式に相当するもの

- V群 縄文時代晩期に属する土器
 a類：大洞B・BC式・上ノ国式に相当するもの
 b類：大洞C₁式・C₂式、聖山I式に相当するもの
 c類：大洞A・A₁式、聖山II式に相当するもの
- VI群 続縄文時代に属する土器群
- VII群 擦文時代に属する土器群

石器等

石器等は以下の器種に分類した。

石鏃：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈する5cm未満のもの

石槍またはナイフ：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈する5cm以上のもの

石錐：端部に錐状の突出部が作り出されたもの

つまみ付きナイフ：端部にノッチ状の加工によるつまみが作り出されたもの

ナイフ：主に両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有するもの

両面加工石器：両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有しないもの

スクレイパー：素材の側縁・端部に連続的な剥離によって刃部が作り出されるもの

鐔状石器：主に両面加工で左右対称形に整形され、端部に刃部が作り出されるもの

Rフレイク：剥片に散漫な剥離が施されるもの

Uフレイク：剥片に、使用によると思われる微細な剥離痕が認められるもの

楔形石器：素材の両端部に、対向する剥離や潰れが認められるもの

石核：剥片を剥離した痕跡が認められる、剥片石器と共通する石材のもの

石斧：研磨で整形された斧状の刃部を有するもの

擦り切り残片：石斧製作時の擦り切り作業により発生した、擦り切り痕のある残片。

たたき石：礫にたたき痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

すり石：礫にすり痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

砥石：礫にすり痕が認められるもののうち、研磨作業に使用されたと想定されるもの

扁平打製石器：扁平な礫の縁辺を打ち欠き、半円または楕円に整形されたもので、縁辺に擦り痕を有するもの

石鋸：板状の礫などの素材の縁辺に、断面がV・U字形を呈するすり痕が認められ、石斧製作時の擦り切り作業に使用されたと想定されるもの

石錘：扁平な礫の縁辺に、対向する打ち欠きが認められるもの

台石：礫にたたき痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

石皿：礫にすり痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

加工痕のある礫：礫に散漫・不規則な加工が認められるもの

フレイク：石核・石器などから剥離されたもので、二次加工・使用痕が認められないもの

原石：石器に使用される石材の礫で、使用痕・加工痕の認められないもの

5. 調査結果の概要

近世の畝状遺構（畑跡）が検出された。調査区内で東西約55m×南北約55mの範囲、面積約1,000㎡でⅢ層上面では畝が崩れ平坦になっており、Ⅳ層付近まで下げた時点で畝間の有無が確認できる状況であった。1640年のK o-d 降下時には放棄されてから時間が経過していたとみられるが、耕作土層であるⅢ層上部に自然堆積層が見られないことから、年代的には1640年からそれほど遠くない16世紀末から17世紀前半期に耕作されたものと見られる。

調査区内で、その北側と西側の端部が検出された。畝間の間隔50～150cm、長さ5～25m、掘り込み10cm程度で、耕作は深いところでVa層上面に達している。独立した6列の畝や重複していると見られる畝間の痕跡が確認できるため、一連に見える畝の痕跡も小単位の畑が重なったものである可能性がある。畑跡に伴う遺物は検出されなかった。

北海道教育委員会の遺跡台帳上で森川6遺跡は縄文時代前期の集落跡として登録されているが、今回の調査では縄文時代の遺構は検出されなかった。

出土した遺物は、Ⅲ層から礫3点、V層から土器180点、石器37点、礫214点、Ⅶ層から礫6点、試掘調査で出土した遺物（森町教育委員会で所在が確認できたもの）で礫11点、石器2点、合計453点が出土した。

表 I-1 出土土器一覧

	Va層	Vb層	合計
Ⅲ群a類	7	62	69
Ⅲ群b類	8	58	66
Ⅳ群a類	1	14	15
V群b類		30	30
合計	16	164	180

表 I-2 出土石器一覧

	Ⅲ層	Va層	Vb層	Vc層	Ⅶ層	試掘	合計
石鏃		1	2				3
石錐		1					1
つまみつきナイフ			2			1	3
スクレイパー			2				2
フレイク		2	4				6
石斧			1				1
石斧片		1	4			1	6
扁平打製石器			1				1
台石			3				3
石皿片		2	11				13
礫	3	25	188	1	6	11	234
合計	3	32	218	1	6	13	273

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺環境

北海道南西部にある渡島半島のはほぼ中央、内浦湾（噴火湾）を臨む駒ヶ岳の麓、北西側に位置する森町は、2005年4月1日に隣接する森町と砂原町が自治体合併し、新「森町」となった。

渡島支庁管内茅部郡に属し、町の東側は駒ヶ岳山頂からトドメキ川を境に鹿部町と、西側は茂無部川を挟んで八雲町と、南東側は駒ヶ岳山頂から大沼と宿野辺川を挟んで七飯町と、南側は渡島山脈のを境に北斗市と、南西側は島崎川源流域の分水嶺を境に厚沢部町と接している。

森の地名は、アイヌ語で「オニウシ」で、「オ」生えている、「ニ」木、「ウシ」所、（樹木の多くある所）からの意識で付けられたとされる。町の中央を南北に流れる尾白内川を境に、西側は丘陵性で、渡島山脈より北東に向かって傾斜し、海岸段丘を経て内浦湾に面する。東側の砂原地区は、独立峰であるコニーテ型（成層火山）の活火山である駒ヶ岳（1,131m）の裾野がなだらかに広がる。また町の北西には濁川カルデラ盆地がある。

森川6遺跡は森市街地の南側へ海岸線から約2.5km内陸、森川と茅部中の川に挟まれた内浦湾に向かう緩やかな丘陵地形の標高約90mの北東斜面に位置する。

濁川カルデラは約20,000年～12,000年前に噴火し、火砕流台地を形成したのち、火口が陥没しカルデラを形成した。この火砕流は森川6遺跡の基層を形成している。

市街地の南東にそびえ、町の象徴ともいえる駒ヶ岳は、大規模な噴火を繰り返しており、記録にのこる寛永の大噴火1640年（寛永17年6月13日 現在の7月下旬）では山体崩壊に伴う津波を引き起こし、内浦湾から尾札部方面にかけてコンブ取りなどの船百余艘が被災、七百余人の和人・アイヌが死亡している。このときの降灰量は駒ヶ岳山麓森川付近が最も厚く、150～200cmに達している。

その後、1856年（安政3年）の安政の大噴火では鹿部、ボンベツ（本別）に大きな被害をもたらし、1929年（昭和4年）の大噴火では、浮石流が広い範囲に流出、噴火時に風下であった鹿部、白尻では降灰の厚さが1m前後に達し、海産物ではコンブに多大な被害がでている。

2 寛永の大噴火前後の森町と沿革史

津軽藩士の竹内甚左衛門による『西蝦夷地旅行日記』1809年（文化6年）高橋由彦氏翻刻には次のような記述がある。「同（七月）十七日六ツ時大野を發し村端少し行在住之居処有新開取方之由夫より無程本郷村市野渡村に続き四五十戸貧村也此辺新田多く有後の方八遠に箱館入海見へ左の方ハ高山峯をたたみ右広野の内遙に村里見ゆる八軒屋と云う新村之由向う方遠山の裾野に七重と云う村有相応之村之由都て此辺広野にて芦原なり暫行山手に茨ツ山と云ふ畑小屋三軒有是より暫行峠下と云ふ村有（是まで大野村より一里半程あり野道也）此村取付の辺に田多有花最中出来相応に見ゆる峠登り懸茶屋有夫より峠大阪を登り降り懸之所より大沼有此所に休所有造作結構也メ切にて守る人もなし沼のほとり大部甘町程行亦峠有と田多有此所茶屋壱軒有爰を小沼の峠と云ふ右の方に沼有半道斗行き昼所蓬屋有宿野ツ部と云ふ住居のもの有（大野より此所迄四里あり）此山中都て柏木立雑木とも繁茂せり枯木朽損したるもの幾数ヶ株と云ふかきりなし山中道路甚よし此通りハ内浦嶺（駒ヶ岳）の麓なり昼処より二里半余山中を行き追分有右サワラ街道左鷲の木街道此所に昇休所有是より海手野合四五町行きて懸り間（掛間）と云ふ所有二三十戸村中野合有亦四五町余りも行き門兵衛サワラ（紋兵衛砂原）六七戸是より程無くサワラ村に至る百戸斗相応之所なり止宿噴で大量也今日行程九里半

当所モロランへの渡海場也陸行なれば諸蘭まで五日路所々嶮道多し船路なれば五六里の渡りなり

（中略）同年十九日六ツ半サワラを發し門兵衛サワラ懸り間大白ナイ（尾白内）を行過ぎ森村に至

る廿戸斗入口山手に蝦夷屋敷三軒有村端小川有赤柳原と云ふところ蝦家十二三軒有人家も入込なり是より浜辺五六町ほど行鳥崎と云ふ二三戸此所より岡道を行く新道なり夫より右鷺ノ木村四拾戸斗昼所(此所泊にもなる本陣も相応也サワラよりは迄三里位都て此辺浜辺也鱗屋敷軒有五月頃までハ漁有るよし)村端川有湯崎と云ふ小崎有海之内湯湧出る所有と云ふ数町行てホウビ村二三十戸夫より上カヤコタン(蛇谷)五六軒又五六町行本カヤ部(本茅部)五六戸此辺漁小屋多し夫より石倉村廿戸斗此処より山手へ壱里余入り温泉有湯川の湯と云ふよし夫より茂無部村十五六戸暫行て落部村三十戸斗(鷺の木よりは迄三里余)村端川有船渡しは是より浜辺を行程無く野へ入り暫行て又浜へ下る此間壱里浜辺切際高にて東北の風強き節ハ往來不成のたおへ村(野田生)六七戸(落部村にて人夫馬方何れも夷人出て言語更に分らず漂流人の異国に渡るもかく可有とおしはかれり)此辺夷人家入混ス……」

これには19世紀初頭の幕府直轄期の村政が始まった頃の茅部の規模や交通網などの詳しい記載がみられる。1854年(嘉永7年)3月の松前藩による調査では茅部の人口は1,519人で、そのうち和人が290戸、1,433人を占める。また、鷺ノ木のみがアイヌとの混在地となっている。

茅部場所	戸数	男	女	合計
砂原	96	261	241	502
掛間	35	77	60	137
尾白内	23	50	53	103
森	32	99	82	181
鷺ノ木	77	222	195	417
鷺ノ木アイヌ	18	44	42	86
棒美	4	7	9	16
蛇谷古丹	5	13	12	25
本茅部	14	24	14	38
石倉	4	7	7	14
合計	308	804	715	1519

では、この地に何時ごろから和人が移住してきたのか沿革史とともに概観する。

1454年(享徳3年)南部氏に追われた安東政季氏の渡島を期に道南地方において和人の人口が増大し、アイヌとの関係が悪化、1456年には鍛冶屋村の刀工と一人のアイヌ子の争いからコシヤマインが蜂起する。これを鎮圧した花沢館の武田信広(後の蠣崎氏)が後に台頭するが、その後もたびたび衝突は起こり、1513年(永世10年)には松前の大館が攻略され「駒ヶ岳伝説」が起こる。

※「駒ヶ岳伝説」・永世10年アイヌが蜂起し、松前の大館を攻め、大館主の相原季胤を滅ぼす。

季胤は防戦及ばず2人の娘を連れて大沼まで逃亡するも逃げ切れず、7月3日自害する。愛馬は悲しき嘶きを残して山上に姿を消し、以降この山を駒ヶ岳と称するようになったと伝えられるもの。

1551年(天正20年)四世の蠣崎末廣は瀬田内の長ハシタイン、知内の長チコモタインとの間に「夷狄之商船往來之法度」を交わし、両者の関係は著しく融和、上ノ国の天の川河口と知内川河口を結んだ線を境とする初期の和入地確定にいたる。

※「夷狄之商船往來之法度」・諸国から来た商船に課税し、両酋長に配分、海上往來の船が西は上ノ国、東は知内沖を通過する際に必ず帆を下ろし敬意を表させた。

1590年(天正18年)五世の蠣崎慶広は豊臣秀吉に謁し、「領知朱印状」を受け蝦夷島主の待遇となり、後に徳川家康に謁し、姓を松前と改め全島支配の藩政を布く。

1604年(慶長9年1月)に与えられた「黒印状」により、松前藩はアイヌとの交易独占権をえる。

石高のない松前藩ではそれまでアイヌとの交易が取入源であったが、交易の独占権を得ると17世紀前半頃までには上級藩士に対し蝦夷地の漁鯨園（イオル）を商場と称し、交易権を割り当て、耕地にかわる知行として与える「商場知行制」が成立した。これにより、アイヌは知行主とのみ交易が許され、自由な交易が出来なくなる。

そのころから茅部地域で鯨漁が盛んになり、砂原にいち早く定住者が現れる。1532年（天文元年）この地が入稼地となると、津軽国蟹田村より権四郎が漁夫十余戸を移して開村し、その後1571年（元亀2年）和入戸数が32戸になり砂原村と称するようになる。

以降、砂原村はこの地の本村となり1726年（享保11年）頃から1792年（寛政4年）まで頭取をおき、砂原から茂無部川までの収税などをおこなっている。

1555年（弘治元年）鷺ノ木に箱館在亀田より万太郎・市兵衛の漁夫2人が移住し、アイヌとともに漁業を営みはじめる。

鷺ノ木はアイヌ語で「ユープト」といい、湯の川口の意だったが、和人の移住後村の中央崖上の老樹に日々鷺が飛来することから鷺ノ木の地名が生じたとされている。また、最初に移住した二人の居住地わきの川を万太郎川・市兵衛川と称し今日まで名前が残っている。

永禄年間（1558～1569年）には、鷺ノ木を中心として、乾魚、獣皮が多くなり、中でも鷺羽（矢羽用）を名産とするようになる。

慶長年間（1596～1614年）には、鷺ノ木や尾白内に鯨引網漁・刺網漁者が多数入稼し、1601年（慶長6年）上磯の有川村より千歳末吉が鷺ノ木に定住し、付近のアイヌや入稼者の漁労取り締まりをはじめている。

地理的な便利さと魚類・海藻類が豊富なこの地域では、その後も徐々に漁労入稼地や定住者は増え、1615年（元和元年）には尾白内に吉田作兵衛と子之助の2人が定住し、同年、四司馬字兵衛が昆布採取の和入稼地の中心であった鹿部の本別に定住する。1624年（寛永元年）には鷺ノ木の和入戸口が増加し鷺ノ木村と称する様になり、同年掛洞も鯨漁の入稼地となる。

1640年（寛永17年）には前記の駒ヶ岳が大噴火、1663年には対岸の有珠山が大噴火する。

1669年（寛文3年）には日高の長シャクシャインが反乱し、国縫にまで達した反乱軍を幕命により松前泰広が撃退する。この乱は日高から内浦に及ぶ大乱であったが、小安から落部までを持場とする内浦の長アイツラインはこの反乱に同調せず、チャシを修築、沿岸防備をおこなっている。

この乱のち松前藩は、対アイヌ交易の絶対的主導権をえるようになる。また、それまでの「商場知行制」（家臣の給地における自己経営）は「場所請負制」（上納金で有力商人に経営権を与える）へと変化してゆき、制度の発展とともに、有力なアイヌによってまとめられていた地域は細かく分けられ、交易の拠点に運上屋、漁場ごとに番屋が建てられる。渡島半島東部では、1669年（寛文9年）頃は、野田追のみが商場とされていたが、1695年（元禄8年）には茅部場所と野田追場所との境界論争から茅部の存在が知られるようになり、元禄期（1688～1710年）には箱館六カ場所が成立する。

※『蝦夷商賈聞書』1739年（元文4年）によると「箱館六カ場所」・六カ場所ともいい、小安から野田追までの沿岸地帯を、小安、戸井、尻岸内、尾札部、茅部、野田追の六カ所にわけた漁業交易区域で、森町は茅部場所にあたる。

茅部場所では砂原に運上屋が建てられ、のちに鷺ノ木村の発展に合わせ、同地にも運上屋が建つことになる。アイヌに対する松前の支配が絶対的なものになると、六カ場所における和人の移住はさらに増え、1677年（延宝5年）尾札部村が開村、1718年（享保3年）に白尻が開村、1728年（享保13年）蛭谷に陸中国盛岡より木村辰之丞が移住、鯨刺網をはじめ、1748年（寛延元年）には尾谷文治が本茅

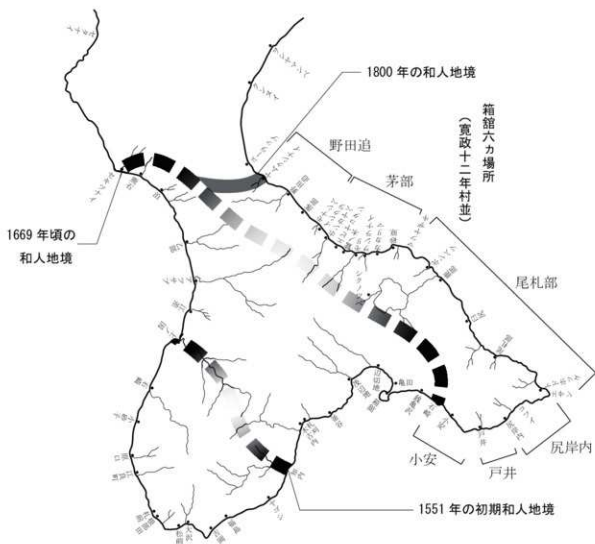
部に定住し、1752年（宝暦2年）には掛調が開村となる。

宝暦年間（1751～1763年）頃の茅部場所は鯨の豊漁地として有名になり、漁期には地元漁民のほか箱館、亀田、上磯などから多数の入籍者が集まり大盛況となる。なかでも宝暦7年の春鯨は大豊漁で、獲れすぎた鯨の処置に困った漁業者は合議の上、大部分を砂地に埋め供養塔を建てている。当時鯨は乾魚とするだけで鯨挫粕の製法が知られていなかったとみられる。

※「鯨供養塔」茅部郡森町字本茅部町 昭和38年北海道有形文化財指定

1782年（天明2年）には森村にも大崎松之助が移住、これが森の最初の和人移住の記録となる。1799年（寛政11年）頃には垣原治六が内陸の宿野辺（赤井川）に移住し、木材業と昼所経営をおこなう。これは『西蝦夷地日記』に書かれる「宿野ツ部の昼所蓬屋」とみられる。尾白内は最初の移住から百数十年を経た1797年（寛政9年）でも戸数十戸あまりで、土地の広い森村や尾白内村の移住や人口増加が周辺に比べおくれる傾向がある。

18世紀末頃には外国船もしばしば北海道近海に現れるようになり、1799年（寛政11年）から7年間、幕府が東蝦夷地（太平洋側）を直轄し、幕領化する。翌年、幕府は六ヶ場所を村並みとし、野田生と遊楽部の間の山越内までを和入地とし、同地に関所を建てている。



図Ⅱ-1 和入地の変化と箱館六ヶ場所

3 町内の遺跡

平成17年、旧森町と旧砂原町との合併で、両町の遺跡も新「森町」の登録となり、平成23年3月現在、51カ所の遺跡が登録されている。

町内での発掘調査は、昭和25年10月に森高校のテニスコートの整地中に発見された清澄遺跡（旧高校台遺跡）を当時の森高校の教諭であられた小林露竹と千成重雄の両氏が発掘調査したものが最初である。この調査では、上層から縄文時代後期、下層から縄文時代中期の遺物が出土し、住居址や石器製作址が確認されている。

昭和26年から33年にかけて東京大学駒井和愛が尾白内貝塚の調査を行ない、住居址や人骨の残る2体合葬墓などを検出している。遺物は、恵山式土器、土師器・須恵器などのほか銚頭、骨針などの骨角器、動物遺存体が出土している。

昭和30年～40年代にかけては、森町の文化財調査委員であった熊野喜藏が姫川1遺跡（旧姫川A遺跡）、姫川2遺跡、森川1遺跡などを調査し、出土資料は熊野コレクションとして道立開拓記念館に所蔵されている。

昭和38年函館博物館が森川貝塚の調査を行ない、下層から縄文時代前期の遺物、上層からは統縄文時代の恵山式・擦文時代・中世の遺物が出土している。

森町教育委員会による調査は昭和46年に姥谷遺跡、昭和49年に島崎遺跡、昭和51年にオニウシ遺跡、昭和59年・平成5年に御幸町遺跡などを調査している。島崎遺跡で検出されたKo-d層直下の10条の溝跡は、畑の畝間状遺構と確認されている。

平成2年からは北海道縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施され、新たに27遺跡が見つかった。平成13年度以降からは大規模な発掘調査を実施しており、森町教育委員会は鷺ノ木3遺跡・鷺ノ木4遺跡・鷺ノ木5遺跡・鷺ノ木7遺跡・栗ヶ丘1遺跡・森川2遺跡・森川5遺跡・駒ヶ岳1遺跡の調査を行なった。

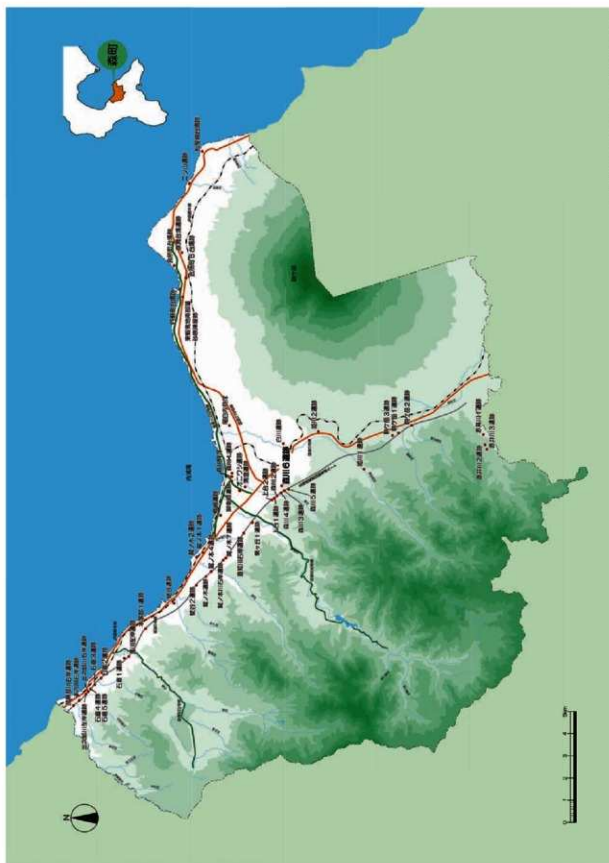
このうち平成15年から16年にかけて調査された鷺ノ木5遺跡では、縄文時代後期前葉の道内最大規模のストーンサークルや堅穴内に掘られた墓坑が検出された。これらの遺構は縄文時代の墓制や祭祀、東北地方との交流を考える上で極めて重要な遺構と判断され、台地上の「鷺ノ木5遺跡」と低位の段丘に位置する「鷺ノ木3遺跡」を統合し、平成18年1月に「史跡 鷺ノ木遺跡」となった。

平成17年度から鷺ノ木遺跡の保存整備に係る事業が継続しておこなわれており、調査は現在も同教育委員会により実施されている。また、遺跡の登録番号は、元「鷺ノ木3遺跡」の27番が欠番となっている。

財北海道埋蔵文化財センターは平成13年から20年にかけて、本内川右岸遺跡・三次郎川右岸遺跡・三次郎川左岸遺跡・石倉1遺跡・石倉2遺跡・石倉3遺跡・石倉4遺跡・石倉5遺跡・濁川左岸遺跡・本茅部1遺跡・倉知川右岸遺跡・上台1遺跡・上台2遺跡・森川3遺跡・森川4遺跡の15の遺跡で合計82,199㎡の発掘調査を実施してきた。

森川3遺跡では、長軸約13m短軸約10m深さ約1.2mの縄文時代前期の大型住居が検出された。周囲の掘上げ土は幅が約5m、厚さは最大で80cmで広がる。付近ではこれに次ぐ規模の住居址が2軒検出された。また、これら住居址上の包含層からは、統縄文時代の恵山式土器がまとめて検出されている。

石倉3遺跡、倉知川右岸遺跡、三次郎川右岸遺跡からは縄文時代後期前葉の配石が検出されている。町教委の調査も含め、海岸線から約2.5km内陸の上台2遺跡、森川3遺跡、森川5遺跡では調査区のほか全域から、畑跡（畝状遺構）が検出されている。時期は16世紀末から17世紀前半のものとみられる。



(森町教育委員会作成の図に加工修正した)

図II-2 森町の遺跡位置図

表Ⅱ-1 森町の遺跡一覧

登録番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期	備考
B-14-1	松原町台墓群	古墳群	砂原4丁目	海岸段丘	30	古墳	
B-14-2	二上山遺跡	土居	砂原第3・4丁目	海岸段丘	10	縄文中期・後期	
B-14-3	庄原町台墓群	古墳群	砂原5丁目	海岸段丘	10	古墳	
B-14-4	吉野町台墓群	古墳群	砂原4丁目	海岸段丘	3	古墳	
B-14-5	吉野町台墓群	古墳群	砂原4丁目	海岸段丘	10	古墳	
B-14-6	吉野町台墓群	古墳群	砂原2丁目	海岸段丘	2	古墳	
B-14-7	新堀尾池遺跡(池原遺跡)	埴原遺跡	砂原3丁目	海岸段丘	10	古墳	1973年4月 国指定史跡
B-14-8	藤川1	遺物包含地	藤川130-1・18・4	河原段丘	141	縄文中期(内陸上層)	新島川人墓群(1689)遺跡(森町史)
B-14-9	藤川2	遺物包含地	藤川17-9・216・217	河原段丘	112	縄文中期(内陸上層)	新島川人墓群(1689)野宮(森町史)
B-14-10	白川	遺物包含地	白川49-18	河原段丘	86~90	縄文晩期・縄文(北)	1166の1(森町史)
B-14-11	森川1屋	土居	森川町78-29(2)	海岸段丘	13~15	縄文前期・縄文(森山)・縄文・中古墳	新島川人墓群(1962)・中島群(1965)・19(藤原1971) 藤原台遺跡調査報告(森町史) 町教委2002
B-14-12	森川1	遺物包含地	森川町69-23(2)	海岸段丘	15~14	縄文前期・中層・後期(糸布系)・縄文(森山)	新島川人墓群(1964)内陸上層(森町史) 町教委2004
B-14-13	森川2	遺物包含地	渡辺31-1,30-2	台地	80~100	縄文前期・中層・後期・晩期・縄文・中古墳	町教委2004
B-14-14	木内川右岸	遺物包含地	石巻町10-2・8	台地	40~40	縄文中期・後期(天船寺)	町教委2001(182)
B-14-15	茂原川右岸	遺物包含地	石巻町10-2・5	台地	40~40	縄文中期・後期	
B-14-16	瓦内川屋	土居	字瓦内(908,909-11(2))	海岸段丘	10~14	縄文前期・晩期・縄文(森山)・縄文	1801~1803(19)藤原台遺跡(森町史) 町教委2001(182) 藤原台遺跡調査報告(森町史)
B-14-17	島崎	遺物包含地	島崎21-1,富士見町13(2)	海岸段丘	15~30	縄文前期・中層・後期(前葬・中古墳(藤原))	町教委1975(1,森町史)
B-14-18	姥堂	遺物包含地	姥堂町146-11(2)	河原段丘	30~32	縄文中期・後期	1972(崎崎1)一巻野宮遺跡(森町史)
B-14-19	赤井川1	遺物包含地	赤井川229	丘陵	175~190	縄文中期	
B-14-20	赤井川2	遺物包含地	赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	
B-14-21	赤井川3	遺物包含地	赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
B-14-22	オウゴン	墓冢群	上台町256-18	海岸段丘	25~26	縄文早期(貝段文)・中層	町教委1972(1,森町史)
B-14-23	森中町	遺物包含地	森中町132-1(藤原)・132(2)	海岸段丘	4~20	縄文早期・中層・後期・晩期・縄文・縄文・中古墳	町教委1983(194)
B-14-24	溝原	遺物包含地	溝原27-1,29-2,320-16,320-18	海岸段丘	32~39	縄文中期・後期	新島川人墓群(1660)中島群(千代田区)内陸部の発掘調査実施記録(森町史)
B-14-25	蟹ノ木1	遺物包含地	蟹ノ木46-11(2)	海岸段丘	15~20	縄文中期	
B-14-26	蟹ノ木2	土居	蟹ノ木42(2)	海岸段丘	40	古墳	縄文4世紀1800年
B-14-28	蟹ノ木4	遺物包含地	蟹ノ木506-310	河原台地	45~70	縄文早期・中層・後期・晩期・縄文(森山,長史)	2004 蟹ノ木遺跡調査報告,町教委2004(2006)
B-14-29	森川右岸	墓冢群	石巻町281,416-1,448	河原段丘	40~50	縄文前期・中層・後期・縄文(森山,長史)	遺文2001(190)・2004(2005)・2005(240)
B-14-30	木本町1	遺物包含地	木本町286,272-274	海岸段丘	80~85	縄文前期・中層・晩期・中古墳	遺文2001(191)・2004(190)
B-14-31	蟹ノ木1	遺物包含地	蟹ノ木30-44	河原段丘	35~45	縄文早期・前期・中層・後期・晩期・縄文(森山)	町教委2004
B-14-32	森川右岸	墓冢群	蟹ノ木27,11-1(2)	丘陵	75~80	縄文(貝段文)・前期・中層・後期・晩期・縄文(森山)	遺文2004(196)
B-14-33	森川3	墓冢群	森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前期・中層・後期・晩期・縄文(森山)・古墳(藤原)	遺文2005(222)・2006(214)
B-14-34	上台1	遺物包含地	上台町23-1,42-1,304	丘陵	90	縄文前期・中層・後期・晩期	遺文2005(227)
B-14-35	蟹ノ木	塚群(野宮・磯崎・鹿石遺跡・磯崎遺跡)	蟹ノ木499-2,33(2)	河原段丘	70	縄文早期・前期・中層・後期・晩期・縄文(森山,長史)	2006年(1) 藤原台遺跡(森町史) 蟹ノ木遺跡・蟹ノ木遺跡調査報告(町教委2006-2009(2010))
B-14-36	石倉1	遺物包含地	石巻町385-137,403,404,420	丘陵	30~40	縄文早期(貝段文)・中層・後期・晩期・縄文(森山,長史)	遺文2005(217)・2010(286)
B-14-37	森川4	遺物包含地	森川町317-18	河原段丘	90	縄文前期・中層・後期・晩期	遺文2005(218)
B-14-38	上台2	墓冢群	上台町226-5	河原段丘	90~100	縄文早期(貝段文)・前期・中層・後期・晩期・古墳(藤原)	遺文2005(219)
B-14-39	石倉2	墓冢群	石巻町46,473-1,9・4,404-1,306(2)	河原段丘	60~75	縄文中・晩期	遺文2004(197)
B-14-40	石倉3	遺物包含地	石巻町42,483,490	河原段丘	65~75	縄文前期	遺文2004(205)
B-14-41	石倉4	遺物包含地	石巻町51,320,321	河原段丘	60	縄文前期・中層	遺文2005(219)
B-14-42	森川5	遺物包含地	森川町317-7・8,318-1	丘陵	110	縄文前期・中層・晩期・縄文(森山)・古墳(藤原)	2004 森川遺跡2の発掘,町教委2007
B-14-43	石倉5	遺物包含地	石巻町52,313,319	河原段丘	35~60	縄文前期・後期・縄文(森山)	遺文2004(200)・2005(219)
B-14-44	三次郎川右岸	遺物包含地	石巻町13,316	河原段丘	40~47	縄文前期・中層・後期・晩期・縄文(森山,長史)・縄文	遺文2006(210)
B-14-45	三次郎川左岸	遺物包含地	石巻町10-24	河原段丘	35~36	縄文前期・後期・縄文(森山,長史)	遺文2005(210)
B-14-46	蟹ノ木7	遺物包含地	蟹ノ木397-11(2)	丘陵	60	縄文前期・中層・後期・晩期・縄文(森山)	町教委2006
B-14-47	蟹ノ木川右岸	遺物包含地	蟹ノ木376	台地	60	縄文	
B-14-48	姥堂2	遺物包含地	姥堂町281	丘陵	40	縄文	
B-14-49	蟹ノ木1	遺物包含地	蟹ノ木228-10	河原段丘	185	縄文早期(東照宮跡)	町教委2006
B-14-50	蟹ノ木2	遺物包含地	蟹ノ木479-3	河原段丘	177	縄文後期	
B-14-51	蟹ノ木3	遺物包含地	蟹ノ木221-18,23~25	河原段丘	188	縄文後期(手取)	2007 遺跡発掘調査報告
B-14-52	森川6	墓冢群	森川町302-21,22,24~25	丘陵	90	縄文中期・後期・晩期・古墳(藤原)	遺文2001(177)

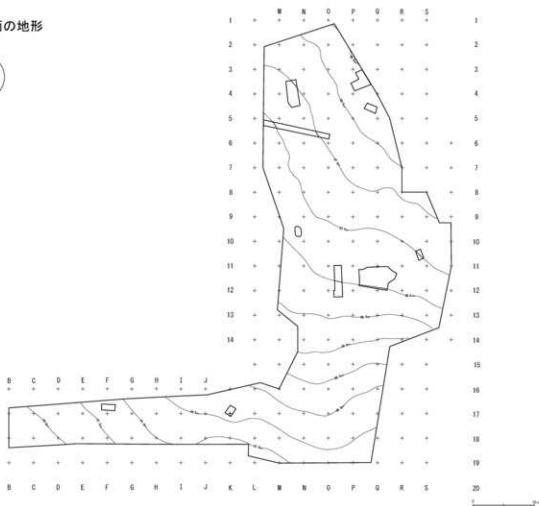
* 遺跡名称の欄には「遺跡」の文字、所在地の欄には「字」の文字を省略した。

* 国史館の資料の数字は国史である。

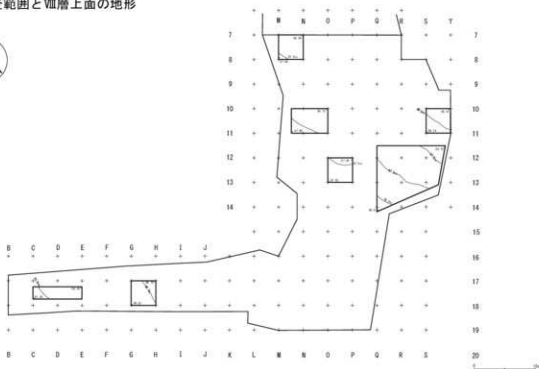
* 国史館の森町教育委員会「町教委」資料(法人北海道埋蔵文化財センター)は「遺文」と省略した。

* 国史館の森町内の数字は財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書のシリーズ番号である。

Ⅲ層上面の地形



Ⅶ層調査範囲とⅧ層上面の地形



図Ⅱ-3 Ⅲ層上面の地形とⅦ層調査範囲

Ⅲ 遺構

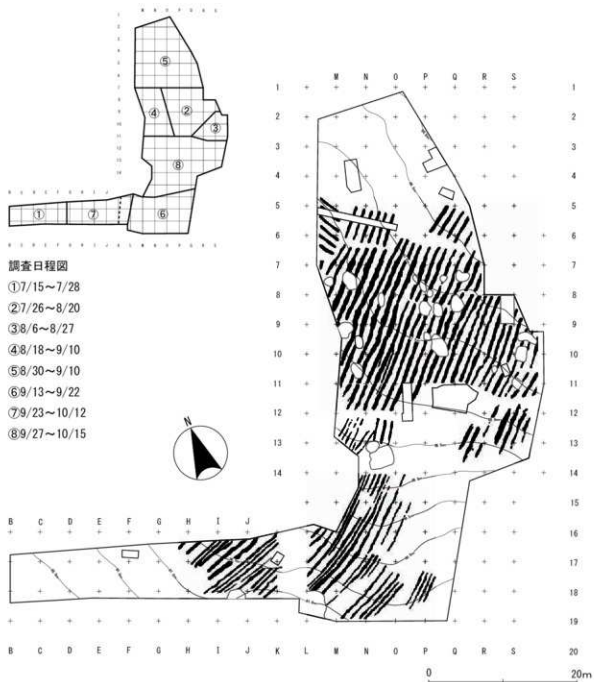
調査経過

1640年降下のK o-d層下位より畝状遺構（畑跡）が検出された。

検出された場所は、傾斜角10度未満の緩やかな北東向き斜面で、標高86～92mの範囲である。

試掘調査では畑跡は未確認であったが、約300m南西側で北海道縦貫自動車道建設にともない調査した森川3遺跡・森川5遺跡では、調査区のはほぼ全面から畑跡が検出されていた。

そのため、本遺跡ではⅡ層除去作業後、Ⅳ層の褐色土層付近まで丁寧に掘り下げ畑の有無を確認しながら調査をすすめた。



図Ⅲ-1 畝状遺構全体図と調査日程図

耕作面に近いⅢ層上面は平坦で、畝の凹凸の痕跡は無く、畑跡は耕作土とみられるⅢ層を除去後に確認される状況である。そのため、畑跡が検出されることが予測される範囲では、予め断面観察をする場所を決め、土壌サンプルもそこからとった。

発掘調査は、表土除去作業に調査区内を横切る送水管切り替えなどの工程が含まれるため、8区画に分けておこなった。調査開始当初は、調査区西端の①(図Ⅲ-1調査日程図参照)を掘削したが、畑跡は確認出来なかった。7月26日～9月10日まで、②～④を調査した。ここではほぼ全面から畝間が出検され、同時に調査区内のどこかに畑の端が検出されることが予測された。拡張範囲の⑤では畝間はそのまま調査区外まで伸びるものとみていたが、予想に反し5ライン付近で途切れた。この付近ではおよそ4.5×5.5mの範囲で独立する6列の畝間や、方向が90度異なる6列の畝間も検出された。

調査区南端の⑥の東側では樹木の根が多いためかB-T層の残りが悪く、畝間を確認出来なかった。しかし、B-T層が残っている範囲では畝間が確認出来ることから、本来畑跡は全面にあったのかもしれない。また、調査区より南側にも畑は広がっているものとみられた。

調査区⑦では畑の西側端が出検された。西端部付近は、特にB-T層の残りが良く、耕作を受けた範囲とⅣ層面との土色の差が顕著に現れた。また、Va層上面では、畝間と重なる位置で連続する耕作痕が出検された。耕作痕の確認作業は、②の調査区で畝間を掘る作業をおこなった結果、耕作痕のほとんどが失われたことから調査方法を変えたもので、畝間を確認測量した後、Ⅳ層を丁寧に掘り下げ、耕作痕がそれぞれ独立した痕跡になるまで調整して検出した。

畑跡の構造

畝間を断面で観察すると、Ⅲ層上面付近から皿状に落ち込み、深さは6～15cmの範囲であるが、おおむね10cm前後の深さで、Va層中に達するものが多い。断面図ではⅢ層を切る表現だが、実際にはⅢ層上面付近からの耕作とみられ、年代的には16世紀末～17世紀前半のものと考えられる。

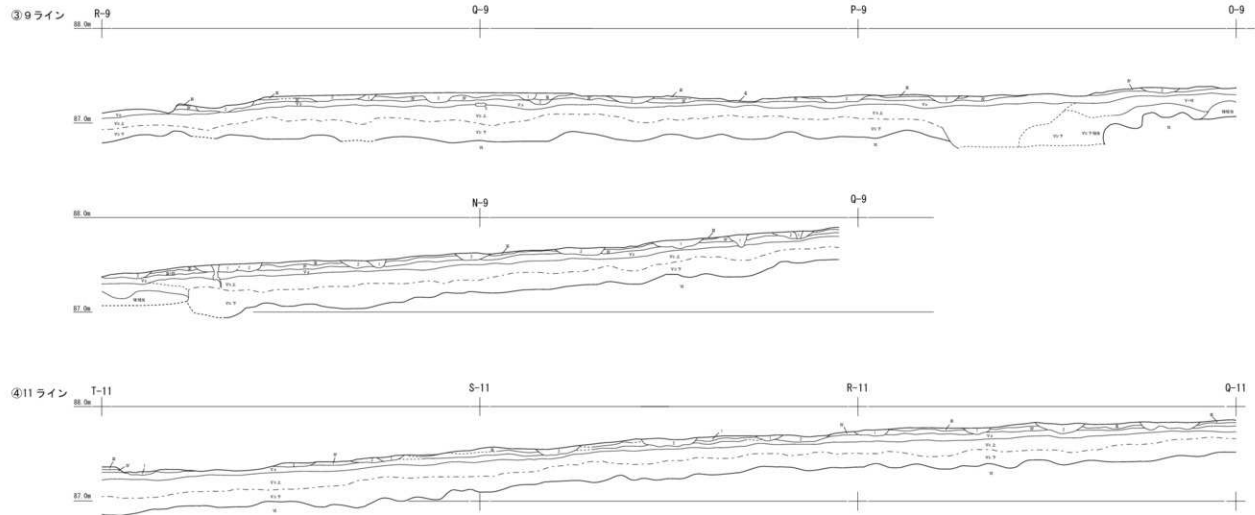
畝間の幅は30～50cmの間で、40cm前後のものが多い。畝間の間隔は、畝間の心点間で計測し、100～110cmのものが多い。畝間の方向は斜面と直行する南西—北東の方向のものがほとんどだが、畑の北側端に等高線と平行する南南東—北北西方向の畝間が6列検出された。畝間の長さは、確認できた長いもので24m(一連のものかは不明)、独立した畝で4.5mである。

耕作痕はVa層上面で検出され、B-T層ブロックを含むⅢ層土が長方形や台形を呈し、交互に連続して並ぶ。大きさは、小さいもので10×10cmの方形、大きいもので20×16cmの長方形で、鍬や鋤先の形状とみられる。畝間の方向で断面を観察すると、下部は確認面とはほぼ水平で、立ち上がりは片側が90度近い急角度で、反対側は緩やかな傾向がある。

また、全体から見ればごく狭小な範囲だが、Ⅲ層上にⅣ層土が逆転して乗る天地返しの痕跡と考えられる状況が、調査区N-9の、2×3mの範囲でみられた(図Ⅲ-4)。

作付け痕は平面観察では根穴との区別が難しかったが、断面観察でみられる畝上から細長く落ち込む黒色土(図Ⅲ-2・3)が作付け痕である可能性がある。

畑跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかったが、耕作土とみられるⅢ層中からはコガネムシ科の遺体が多数出土した。そのほとんどは発見時に壊れてしまい回収出来なかったが、10㎡の範囲で丁寧に検出を試みたところ9点の遺体が回収された。仮にこの頻度で調査区全体から出土したとすれば、1600点近くがあることとなり、あまりにも不自然な状況である。これは、かつてこの地に好みの植物が生え、多数の個体が集まっていたとみられる。その時点で少なくともこの地は森林や笹原ではなく、作物がある状態か、畑が放棄され雑草が茂った状況だったとみられる。



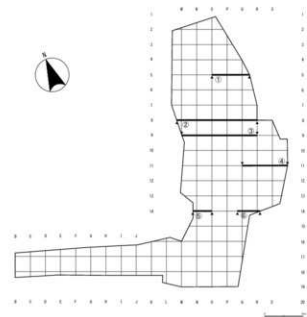
●基本土層

- I (表土)
- II (Ko-d) 灰黄褐色-にぶい黄褐色(10YR 6/2-5/3) 凝縮した軽石が1.5-2m堆積する。上位は細砂。中位は細砂礫。下位は砂礫。
- III 黒色(10YR2/1) しまり中。粘性やや強。
- IV (B-Tn) にぶい黄褐色(10YR5/4) しまり弱。粒子非常に細かく密。
- Va 黒色(10YR2/1) しまり中。粘性やや強。
- Vb (Ko-g 混じり黒) 黒褐色(10YR2/2-2/3) しまりやや弱。粘性中。径1-5mmの軽石少量含む。
- Vb上 (Ko-g) 黒 黒褐色(10YR2/2) しまり中。粘性中。径2mm以下の軽石少量含む。
- Vb下 (Ko-g+黒) 黒褐色(10YR2/3) しまり中。粘性中。径2mm以下の軽石やや多量含む。
- VI (Ko-g) 褐色(10YR4/6) しまり弱。径1mm以下で砂状。径5mm程度の軽石少量含む。
- VI上 (Ko-g+砂) 明褐色(7.5YR5/6) しまりなし。砂状。径2-5mmの軽石やや多く含む。
- VI下 (Ko-g(白)) 明黄褐色(10YR6/6) 砂状。径2-5mmの軽石少量含む。
- VII (粘質土) 暗褐色(10YR3/3) しまりやや強。粘性強。
- VIII① (粘土(Ng)) にぶい黄褐色(10YR5/4) しまりやや強。粘性強。
- VIII② (粘土(Ng)) にぶい黄褐色(10YR5/3) しまりやや強。粘性やや強。

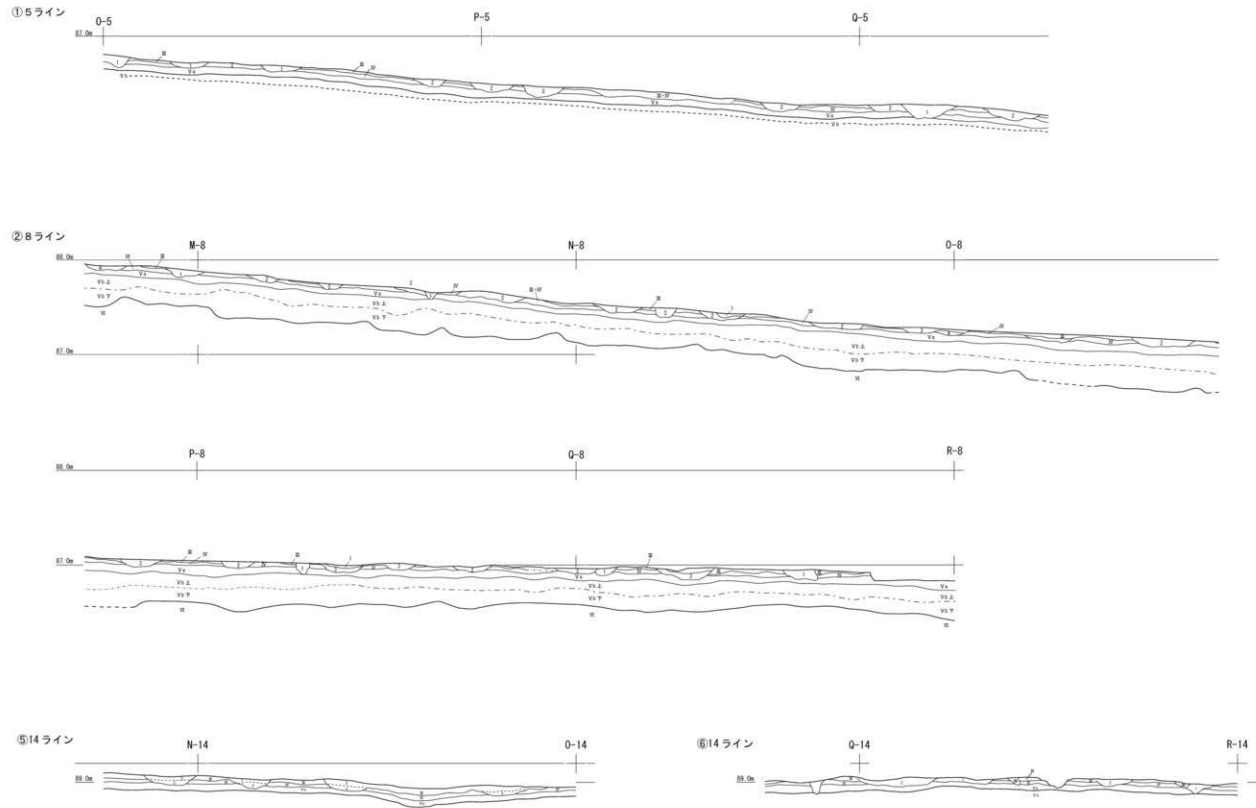
※Ng…濁川カルデラ起源の火砕流堆積物(銀化層)

●畝状遺構土層(各断面図共通)

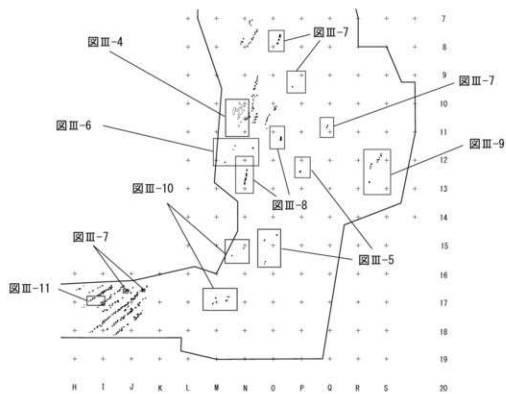
- 1 [III] 黒色(10YR 2/1) しまりなし。フカフカ。均質的。
- 2 [III>IV] 黒色(10YR 2/1)+褐色(7.5YR 4/4) しまり弱。色調やや不均質。
- 3 [III+IV] 黒褐色(10YR3/2)+褐色(7.5YR 4/4) しまりやや弱。色調やや不均質。
- 4 [III<IV] にぶい黄褐色(10YR4/3)+黒褐色(10YR 3/2) しまりやや弱。サラサラ。色調やや不均質。
- 5 [III<IV] にぶい黄褐色(10YR4/3)+黒褐色(10YR3/2) しまり弱。サラサラ。色調均質的。



図III-2 畝状遺構セクション図I



図III-3 畝状遺構セクション図II



耕作痕位置圖

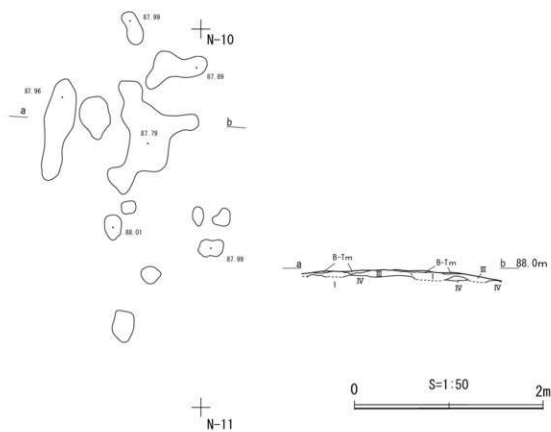
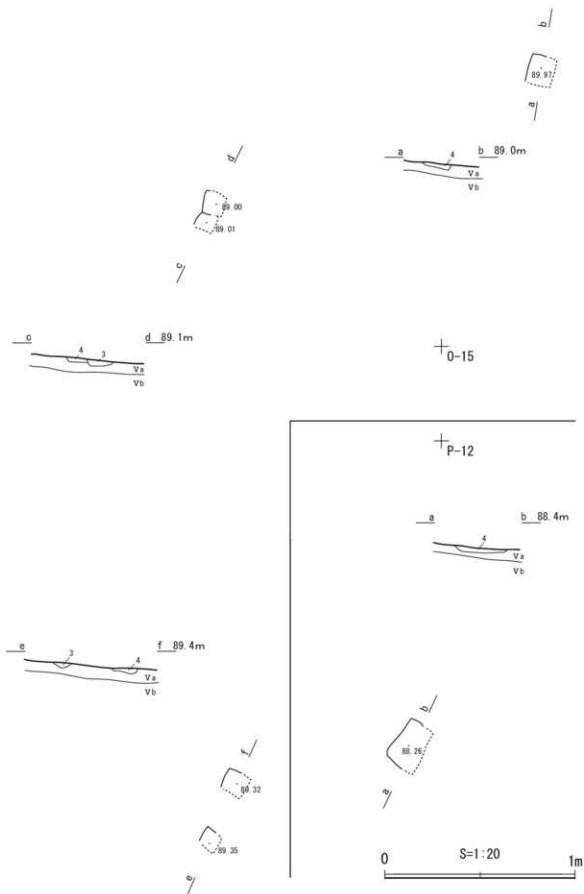


圖 III-4 耕作痕位置圖・畝状遺構上面 (B-Tm 逆転堆積)



図Ⅲ-5 耕作痕 1

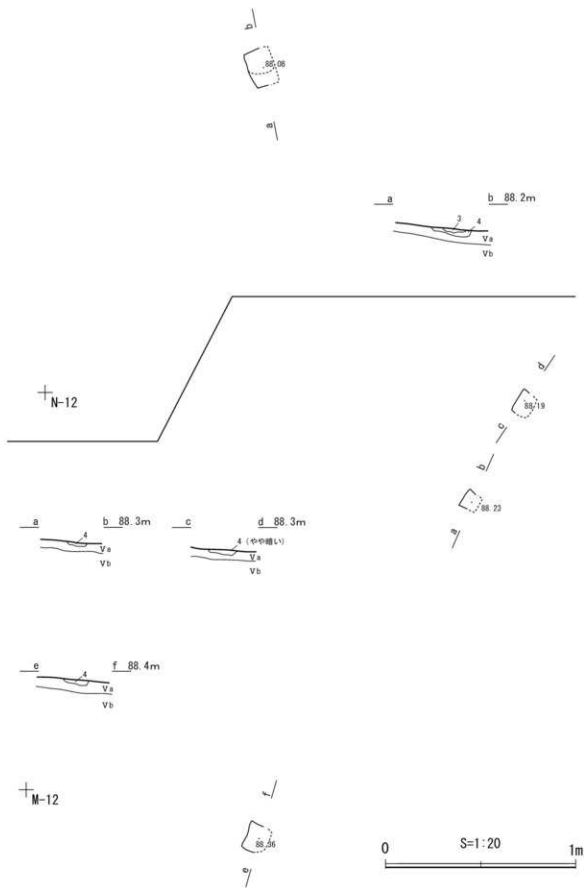
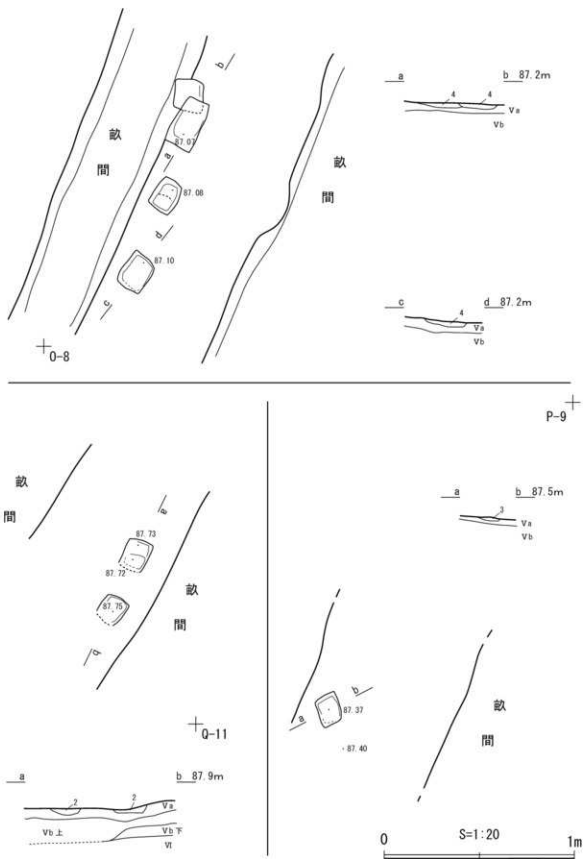
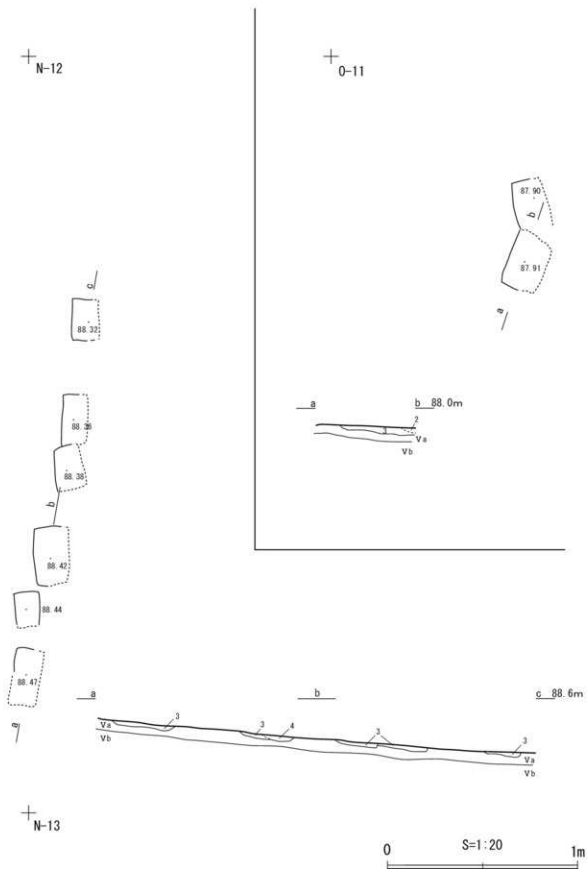


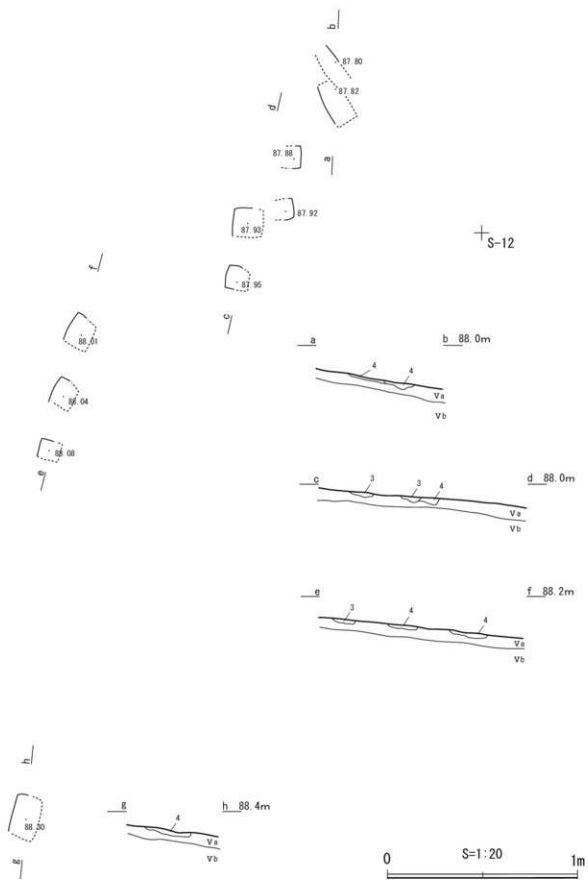
図 III-6 耕作痕 2



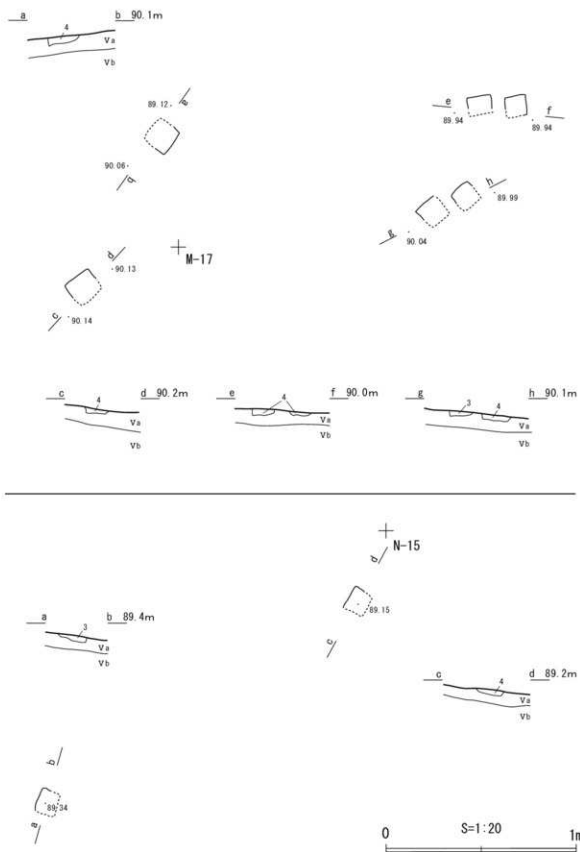
図Ⅲ-7 耕作痕 3



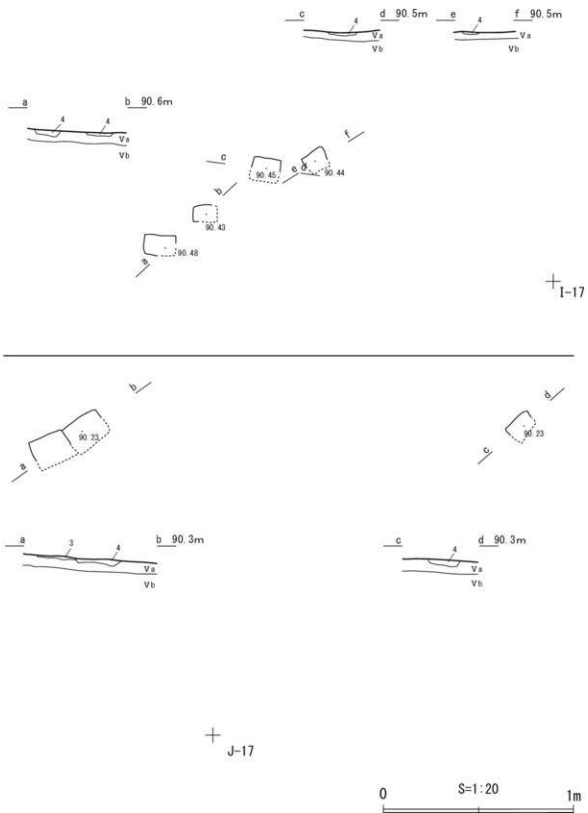
図III-8 耕作痕 4



図Ⅲ-9 耕作痕 5



図III-10 耕作痕 6



図Ⅲ-11 耕作痕 7

IV 遺物

1 土器 (図Ⅳ-1・2 図版12)

土器は180点出土した。内訳は縄文時代中期前半の円筒上層式相当が69点、中期後半の複林式相当期が66点、後期前半期の涌元式相当期が15点、晩期中葉が30点である。

1～8は円筒上層c式相当とみられる。1の口縁部には蛇行する粘土紐が貼付され、捺糸圧痕が施される。2は口縁部の突起部分が欠ける、3～6は同一個体で、調査区西端でややまとまった状態で56点が出土した。口縁部から底部付近までの破片がみられるが、表面剥離が激しく割れも細かいため、ほとんど接合しなかった。胎土には海綿骨針が含まれている。7は口縁突起部の破片で、穿孔されている。口唇部は棒状工具で刻まれる。8は胴部片で、内面は磨かれ、結束羽状縄文が施される。Ⅲ群a類とみられる破片は掲載した5個体だけである。

9～12は縄文時代中期中葉の見晴町式～複林式に相当するものとみられる。9～11は同一個体で、口径約26cmの深鉢である。磨かれた口縁部には4ヶ所の突起を有し、胴部は斜行縄文が施される。出土状況は、P-10を中心に45点が周囲11グリッドに散在して出土した。12は胴部に斜行縄文と2条1組の沈線文が施され、口縁部には深く沈線がめぐる。このほか同時期の土器には胎土に海綿骨針を含む個体があり、全部で3個体が出土している。

13～15は後期前葉の破片である。13は口径約14cmの深鉢で、胎土には海綿骨針を含み、胴部は無文で、口唇には縄文、口縁部には同じ原体による縄線文が1条施される。この破片は6点がまとまって出土し、3グリッドはなれた地点から別に1点が出土したが接合しない。14、15は同一個体とみられる。無紋に沈線文が施され、14の沈線間には条痕文がみられる。胎土にはわずかに海綿骨針を含む。同時期の破片はほかにも1個体はあきらかに、最大3個体が出土している。

16～18は口径約14cmの縄文時代晩期中葉の深鉢である。底部は剥離しているが、状況から上げ底だった可能性がある。口唇には1条の沈線が施され、口縁部は無文で地文との境に1条の沈線が施される。縄文時代晩期の土器は一括で出土した本個体1点である。

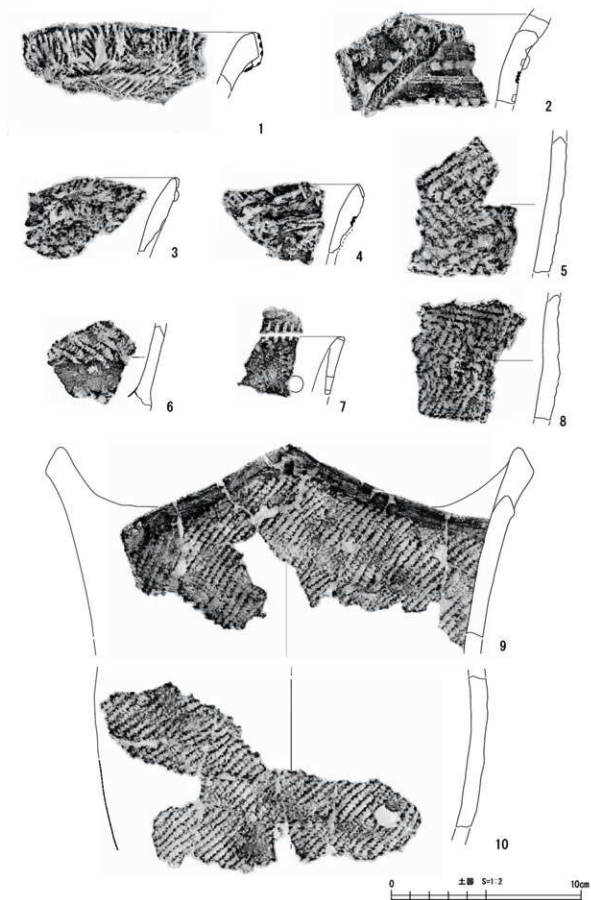
2 石器 (図Ⅳ-3・4 図版13)

礫も含めると、全部で273点が出土しているが、石器に限ると39点の出土量である。これには剥片も含まれるが、頁岩のフレイクは6点のみで、剥片石器よりも出土数が少ない。また、緑色泥岩の剥片は表面に擦痕があることから石斧の破片とみられる。

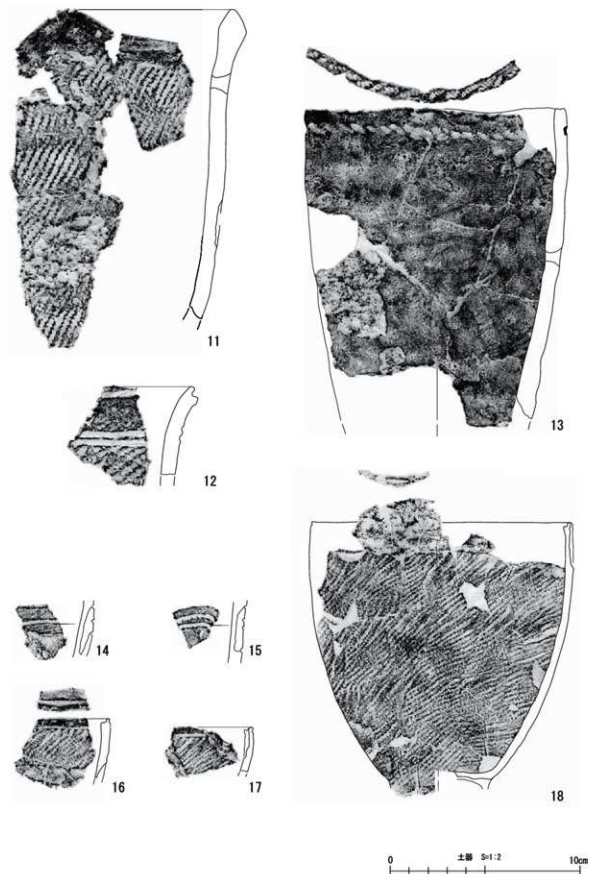
包含層から出土した礫はこぶし大以下の扁平な円礫が多く、ときおり大型の礫が出土したが、周囲には遺構の痕跡はなかった。

出土した石器はすべて実測掲載した。1～9は頁岩製の石器である。1～2は石鏃、3は石鏃未成品としたが、石錐の可能性もある。4は石錐である。5～7はつまみ付きナイフで、7は試掘調査で出土したもの。8、9はスクレイパー類で、8はつまみ付きナイフのつまみ部が破損したものを再加工したものかもしれない。10～14は石斧である。10は完形品で、11～14が刃部の破損片で、石斧の破片はこのほかに2点出土した。欠損品が多いことは、本調査地点が石斧を消耗する地域であったことを示すものであろう。

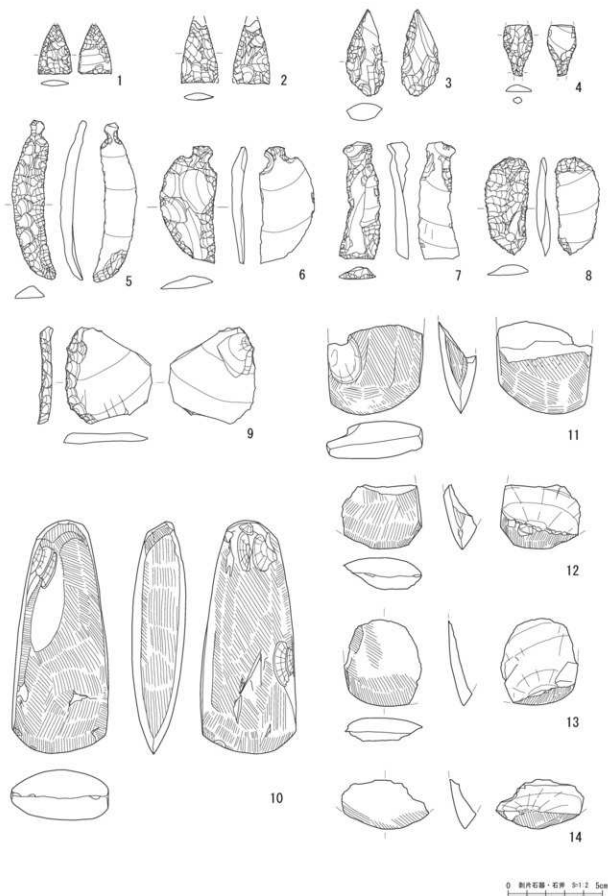
15は扁平打製石器である。16～19は敲打痕がみられないことから石皿としている。16は4グリッドの範囲で出土した10点の破片のうち5点が接合したもの。いずれも被熱している。17と19は石皿片で、19も被熱している。18は完形で、わずかに使用痕がみられる。V b層におかれた状況で、上面はⅢ層上面付近から検出された。



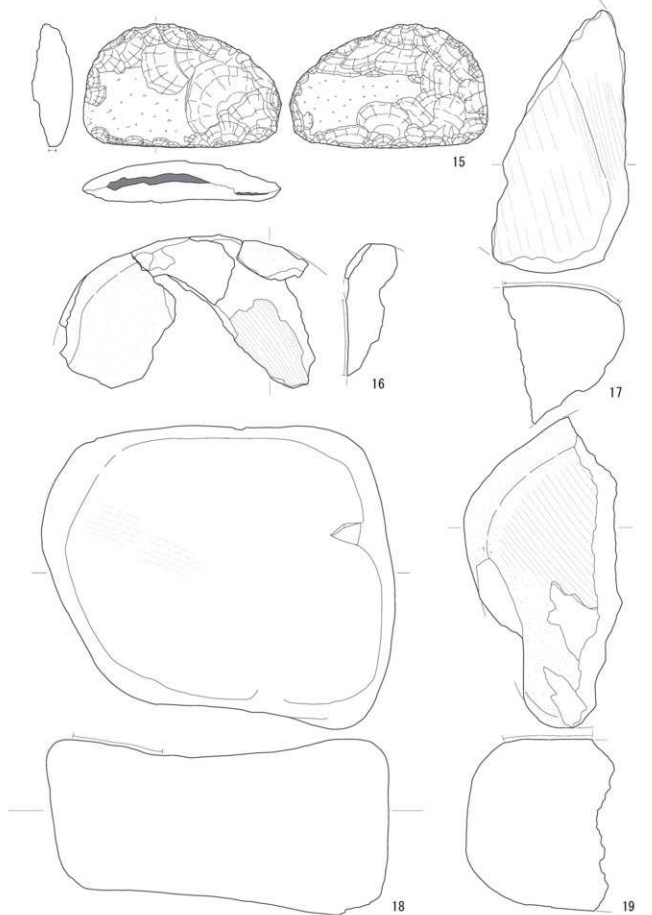
図Ⅳ-1 包含層出土土器 1



图IV-2 包含層出土土器 2



図Ⅳ-3 包含層出土石器 1



图IV-4 包含層出土石器 2

表Ⅳ-1 掲載土器一覧

挿入番号	掲載番号	図添番号	グリッド	層位	分類	器種	部位	備考
図Ⅳ-1	1	12	N-8	Vb	Ⅲa	深鉢	口縁部	貼付帯・燃糸任直
図Ⅳ-1	2	12	P-13	Vb	Ⅲa	深鉢	口縁部	貼付帯・編文任直・任直文
図Ⅳ-1	3	12					口縁部	
図Ⅳ-1	4	12	B-17	Va	Ⅲa	深鉢	口縁部	燃糸任直・貼付帯・第1種羽状編文・海綿骨針
図Ⅳ-1	5	12	B-18	Vb			胴部	同一器体の破片56点が付近から出土
図Ⅳ-1	6	12					胴下部	
図Ⅳ-1	7	12	O-12	Vb	Ⅲa	深鉢	口縁部	口唇部に刻み・海綿骨針・円筒土器の突起部片
図Ⅳ-1	8	12	S-8	Vb	Ⅲa	深鉢	胴部	第1種結束羽状編文
図Ⅳ-1	9	12	O-10	Va			口縁部	
図Ⅳ-1	10	12	P-10-11	Vb	Ⅲb	深鉢	胴部	LR内面は丁寧なみがかれる P-10を中心に11グリッドの範囲で45点が出土
図Ⅳ-2	11	12	Q-9-10				口縁部	
図Ⅳ-2	12	12	S-9	Vb	Ⅲb	深鉢	口縁部	LR・沈線文
図Ⅳ-2	13	12	P-7	Vb	Ⅳa	深鉢	口縁部	口縁～胴
図Ⅳ-2	14	12	O-10	Vb	Ⅳa	深鉢	胴部	沈線文・朱直文
図Ⅳ-2	15	12	N-9	Va			口縁部	
図Ⅳ-2	16	12					口縁部	口唇部に沈線文・LR
図Ⅳ-2	17	12	L-3	Vb	Vb	深鉢	口縁部	一括で30点出土
図Ⅳ-2	18	12					口縁～底	

表Ⅳ-2 掲載石器一覧

挿入番号	掲載番号	図添番号	グリッド	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
図Ⅳ-3	1	13	Q-17	Va	石鏃	頁岩	2.6	1.75	0.3	1.3	先端部を欠損
図Ⅳ-3	2	13	Q-10	Vb	石鏃	頁岩	3.31	1.9	3.7	2.1	先端・基部を欠損
図Ⅳ-3	3	13	M-8	Vb	石鏃未成品	頁岩	4.42	1.98	8.8	7.3	未成品と考えられる
図Ⅳ-3	4	13	M-7	Va	石鏃	頁岩	2.66	1.53	5.6	2	先端部を欠損
図Ⅳ-3	5	13	O-10	Vb	つまみ付きナイフ	頁岩	8.48	18.6	6.5	10.7	
図Ⅳ-3	6	13	S-11	Vb	つまみ付きナイフ	頁岩	6.27	2.95	6.8	11.5	端部欠損
図Ⅳ-3	7	13	B-撰	V	つまみ付きナイフ	頁岩	6.22	2.58	8.8	11.2	試掘調査で出土
図Ⅳ-3	8	13	C-18	Vb	スクレイパー	頁岩	5.15	2.32	6	8.8	
図Ⅳ-3	9	13	O-17	Vb	スクレイパー	頁岩	5.06	4.6	6.3	17.5	
図Ⅳ-3	10	13	R-8	Vb	石斧	緑色泥岩	12.31	5.02	2.78	275.9	
図Ⅳ-3	11	13	Q-10	Vb	石斧刃部片	緑色泥岩	5.01	5.05	2.38	53.6	
図Ⅳ-3	12	13	E-17	Va	石斧刃部片	緑色泥岩	3.61	4.15	18.9	26.1	
図Ⅳ-3	13	13	Q-9	Vb	石斧刃部片	緑色泥岩	4.66	4.04	2.38	18.1	
図Ⅳ-3	14	13	S-11	Vb	石斧刃部片	緑色泥岩	2.96	4.46	1.68	11.7	
図Ⅳ-4	15	13	R-8	Vb	扁平打製石器	安山岩	9.8	15.67	3.46	640	
図Ⅳ-4	16	13	D-16 E-16 E-17	Vb	石皿片	安山岩	14.7	20.4	4.2	782	5点接合・被熱・他5点出土
図Ⅳ-4	17	13	I-17	Vb	石皿片	安山岩	27.7	10.8	11	2565	
図Ⅳ-4	18	13	L-11	Vb	石皿	安山岩	22.9	28.1	15.5	1460	
図Ⅳ-4	19	13	L-5	Vb	石皿片	安山岩	24.6	12.66	13.5	5600	被熱

V 自然科学的分析

1 森川6遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

核加速器分析研究所

1 測定対象試料

森川6遺跡は、北海道森町森川町302-22ほか(北緯42° 5' 18"、東経140° 34' 31")に所在する。測定対象試料は、畑跡Ⅲ層出土木炭(1:I AAA-102304、3:I AAA-102306)、Ⅳ層出土木炭(2:I AAA-102305)の合計3点である(表1)。畑跡Ⅲ層はK o-d層(1640年降下)下、B-T m層(10世紀降下)上に相当する黒色土、Ⅳ層はB-T m層である。

2 測定の意義

遺構の年代を明らかにし、他の遺構との整合をはかる。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l(1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3 MVタンデム加速器(NEC Pelletron 9 SDH-2)をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必

要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

畑跡出土木炭の ^{14}C 年代は、Ⅲ層出土の1が $2320 \pm 30\text{yrBP}$ 、3が $1060 \pm 30\text{yrBP}$ 、Ⅳ層出土の2が $1090 \pm 30\text{yrBP}$ である。Ⅲ層出土の1と3の間には年代差が認められるのに対し、Ⅲ層出土の3とⅣ層出土の2の値は、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で重なり、近い年代を示す。Ⅲ層の1は下位に当たるⅣ層の2よりも古い値となっている。暦年較正年代 (1σ) は、1が $403 \sim 383\text{cal BC}$ の範囲、2が $899 \sim 991\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、3が $907 \sim 1017\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。B-Tm層中から採取された2の年代値は、B-Tmの降灰年代 (10世紀) とおおむね矛盾しない。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102304	1	遺構:畑跡 層位:Ⅲ	木炭	AAA	-24.30 \pm 0.40	2,320 \pm 30	74.94 \pm 0.26
IAAA-102305	2	遺構:畑跡 層位:Ⅳ	木炭	AAA	-24.60 \pm 0.42	1,090 \pm 30	87.34 \pm 0.30
IAAA-102306	3	遺構:畑跡 層位:Ⅲ	木炭	AAA	-26.00 \pm 0.48	1,060 \pm 30	87.59 \pm 0.28

[#4001]

表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102304	2,310 \pm 30	75.04 \pm 0.26	2,317 \pm 28	403calBC - 383calBC (68.2%) 283calBC - 257calBC (4.5%) 244calBC - 236calBC (0.8%)	412calBC - 357calBC (90.1%) 283calBC - 257calBC (4.5%) 244calBC - 236calBC (0.8%)
IAAA-102305	1,080 \pm 30	87.41 \pm 0.29	1,087 \pm 27	899calAD - 920calAD (22.8%) 947calAD - 991calAD (45.4%)	894calAD - 1015calAD (95.4%)
IAAA-102306	1,080 \pm 30	87.41 \pm 0.27	1,064 \pm 26	907calAD - 911calAD (3.8%) 972calAD - 1017calAD (64.4%)	898calAD - 921calAD (16.0%) 944calAD - 1021calAD (79.4%)

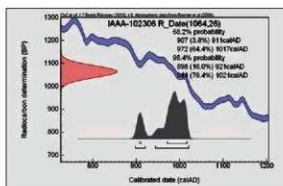
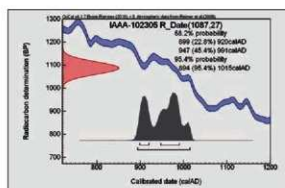
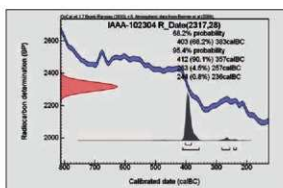
[参考値]

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{13}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



[参考] 暦年校正年代グラフ

2 森川6遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

森川6遺跡は、森町市街地の南側、海岸線から約2.5kmの茅部中の川左岸の台地斜面上に立地する。2010年度の発掘調査において、近世の畑跡が検出された。

ここでは、森川6遺跡において出土した種実類の同定を行い、植物質食料と周辺植生について検討した。

2. 試料

試料は、発掘区L～Qにおいて採取された土壌より水洗・選別された炭化種実類392点である。試料の詳細を表1に示す。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

(1) 分類群

樹木2、樹木・草本2、草本9分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、発掘区ごとに集計したものを表2に示す。主要な分類群は写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

ブドウ属 *Vitis* 種子(完形・破片) ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

マタタビ *Actinidia polygama* Planch. ex Maxim. 種子 マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

[樹木・草本]

ブドウ科 Vitaceae 種子(破片) ブドウ科

この分類群は破片でカラザの部分が欠損しているものである。

ウコギ科 Araliaceae 種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。

〔草本〕

イネ科 Gramineae 穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

タデ属 Polygonum 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

アカザ属 Chenopodium 種子（完形・破片） アカザ科

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

カラマツソウ属 Thalictrum 種子 キンボウゲ科

濃黄褐色でが、狭卵形を呈す。先は細く尖り、腹面は細い隆状がある。

ハギ属 Lespedeza 種子 マメ科

灰黄緑色で横卵形や横楕円形を呈す。へそは狭楕円形や狭卵形で、その縁は高い。へその位置は腹面の中心からややずれる。表面には灰黒色斑がある。同定された種子はほとんどが未炭化で、炭化していたのは1個体であった。

ササゲ属 Vigna 子葉（破片） マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

フウロソウ属 Geranium 種子 フウロソウ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には網目模様がある。同定された種子は未炭化であった。

ヒルガオ科 Convolvulaceae 種子

浅赤黄色で卵形体を呈し、へそは円形の浅い凹みである。基部は腹面方向へ斜切形で光沢は弱い。同定された種子は未炭化であった。

不明種実 Unknown seeds 一種実の形態をしているが、炭化しているため表面模様が欠落し観察できないため不明種実とする。

不明炭化物 Unknown charred material 一炭化しているため表面模様が欠落し同定面が観察できず種実かどうかは不明。

虫瘤 Gall 一植物の一部の細胞が異常に増殖したり、肥大したり、無核や巨大核、多核など核に異常が生じたり、組織文化の過程が狂ったりすることによって引き起こされる、組織や器官の病理学的に異常な形状、または、さまざまな生物によって形成される。

(2) 種実群集の特徴

発掘区ごとに種実類の特徴を記載する。

1) 発掘区L (No45からNo47)

不明炭化物以外は、すべて草本種実のアカザ属である。

2) 発掘区M (No31からNo33)

樹木種実のブドウ科、草本種実のハギ属がわずかに同定された。

3) 発掘区N (No48からNo55)

樹木種実のブドウ属が多く、樹木・草本種実のウコギ科、草本種実のタデ属、フウロソウ属がわずかに同定された。

4) 発掘区O (No1からNo3、No55からNo61)

草本種実のアカザ属が多く、タデ属、ハギ属が伴い、樹木種実のブドウ属がわずかに同定された。

5) 発掘区P (No6からNo14、No34からNo44)

草本種実のアカザ属が多く、タデ属、ハギ属、ヒルガオ科、カヤツリグサ科が伴い、樹木種実のブドウ属、マタタビ、樹木・草本種実のウコギ科がわずかに同定された。

6) 発掘区Q (No15からNo30)

草本種実のアカザ属が極めて多く、イネ科、タデ属が伴い、わずかにカヤツリグサ科、カラマツソウ属、ササゲ属、樹木種実のブドウ属、樹木・草本種実のウコギ科が同定された。

5. 考察とまとめ

森川6遺跡において検出された炭化種実類について、植物種の同定を行った。その結果、樹木種実のブドウ属、マタタビ、樹木・草本種実のブドウ科、ウコギ科、草本種実のイネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ属、カラマツソウ属、ハギ属、ササゲ属、フウロソウ属、ヒルガオ科が同定された。

種実類の組成をみると、いずれの発掘区も草本のアカザ属が極めて多いか、多い傾向である。アカザ属は典型的な畑雑草で集落などのやや乾燥した人為改変地に好んで生育する。また、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、ヒルガオ科は耕地や集落周辺に生育する草本である。こうしたことから、調査地はやや乾燥した畑地の環境が示唆される。なお、栽培植物を含むササゲ属がわずかであるが検出されることから、畑作物の一端として、アズキやササゲなどが栽培されていた可能性が考えられる。

また、ブドウ属、マタタビの変性木本や、カラマツソウ属、フウロソウ属など自然度のやや高い環境を好む草本が認められることから、林縁の近傍であった可能性が考えられる。

参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類, 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
南木睦彦 (1991) 栽培植物, 古墳時代の研究第4巻生産と流通1, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.
南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子, 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
湯川淳一・耕田長 (1996) 日本原色虫食い図鑑, 全国農村教育協会, 326p.

森川6遺跡における種実同定結果

発掘区	試料番号	サンプル番号	層位	分類群		部位	個数	備考
				学名	和名			
L-6 ㉔	45	14	Ⅲ 敵	Unknown charred material	不明炭化物	種子	1	
L-6 ㉔	46	14	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	42	
L-6 ㉔	46	14	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	(破片)	1	
L-6 ㉔	47	14	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
M-9 ㉔	31	9	Ⅲ	Vitaceae	ブドウ科	種子(破片)	2	
M-9 ㉔	32	9	Ⅲ				1	虫喰?
M-9 ㉔	33	9	Ⅲ	<i>Lespedeza</i>	ハギ属	種子	1	一未炭化
N-14 ①	48	16	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
N-14 ㉔	49	18	Ⅲ	<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	5	
N-14 ㉔	49	18	Ⅲ	<i>Vitis</i>	ブドウ属	(破片)	5	
N-14 ㉔	49	18	Ⅲ	Vitaceae	ブドウ科	種子(破片)	3	
N-14 ㉔	50	18	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
N-14 ㉔	51	18	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
N-14 ㉔	51	18	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
N-14 ㉔	51	18	Ⅲ				1	虫喰?
N-14 ㉔	52	19	Ⅲ	Araliaceae	ウコギ科	種子	1	
N-14 ㉔	53	19	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
N-14 ㉔	53	19	Ⅲ	Unknown seeds	不明種実		1	
N-14 ㉔	54	19	Ⅲ	<i>Geranium</i>	フクロソウ属	種子	1	
N-14 ㉔	55	19	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
0-5 ㉔	1	2	Ⅲ 敵	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	10	
0-5 ㉔	2	2	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
0-5 ①	3	1	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	2	
0-5 ①	4	1	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
0-5 ④	5	3	Ⅲ 敵間	Unknown charred material	不明炭化物		1	
0-14 ①	55	20	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
0-14 ①	56	20	Ⅲ	Unknown seeds	不明種実		2	
0-14 ①	57	20	Ⅲ				2	虫喰?
0-14 ㉔	58	21	Ⅲ	<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子(破片)	1	
0-14 ㉔	59	21	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
0-14 ㉔	59	21	Ⅲ	<i>Lespedeza</i>	ハギ属	種子	1	
0-14 ㉔	59	21	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
0-14 ㉔	60	23	Ⅲ	<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子(破片)	1	
0-14 ㉔	61	23	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
P-5 ①	6	4	Ⅲ 敵	Convolvulaceae	ヒルガオ科	種子	2	一未炭化
P-5 ①	7	4	Ⅲ	<i>Lespedeza</i>	ハギ属	種子	1	一未炭化
P-5 ㉔	8	5	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	6	
P-5 ㉔	9	5	Ⅲ	<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	1	
P-5 ㉔	10	5	Ⅲ	Araliaceae	ウコギ科	種子	1	
P-5 ㉔	11	5	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
P-5 ㉔	12	5	Ⅲ	<i>Actinidia polygama</i> Planch. ex	マタタビ	種子	1	
P-5 ㉔	12	5	Ⅲ	Unknown seeds	不明種実		1	
P-5 ㉔	13	6	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	12	
P-5 ㉔	14	6	Ⅲ				1	虫喰?
P-5 ㉔	34	10	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	53	
P-5 ㉔	34	10	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	(破片)	1	
P-5 ㉔	35	10	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	3	
P-5 ㉔	36	10	Ⅲ				1	石
P-5 ㉔	37	10	Ⅲ	Unknown seeds	不明種実		1	
P-5 ㉔	38	10	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
P-5 ㉔	38	10	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	虫喰?
P-5 ㉔	39	11	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1	
P-5 ㉔	40	11	Ⅲ	<i>Lespedeza</i>	ハギ属	種子	2	一未炭化
P-5 ㉔	41	12	Ⅲ 敵	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	4	
P-5 ㉔	42	12	Ⅲ	<i>Lespedeza</i>	ハギ属	種子	2	一未炭化
P-5 ㉔	43	12	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	2	
P-5 ㉔	44	12	Ⅲ	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	

森町森川6遺跡

発掘区	試料 番号	サンプル 番号	層位	分類群		部位	個数	備考
				学名	和名			
Q-5 ①	15	7	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	51	
Q-5 ①	15	7	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	(破片)	1	
Q-5 ①	16	7	Ⅲ	<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉	1	
Q-5 ①	17	7	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
Q-5 ①	18	7	Ⅲ	Gramineae	イネ科	果実(穎)	1	
Q-5 ①	19	7	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
Q-5 ①	20	7	Ⅲ				3	虫糞?
Q-5 ①	21	7	Ⅲ	Gramineae	イネ科	果実(穎)	3	
Q-5 ①	21	7	Ⅲ	<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	果実	1	
Q-5 ①	22	7	Ⅲ	Unknown seeds	不明種実		1	
Q-5 ①	23	7	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	
Q-5 ②	24	8	Ⅲ	<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	1	
Q-5 ②	25	8	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	111	
Q-5 ②	25	8	Ⅲ	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	(破片)	10	
Q-5 ②	26	8	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	2	
Q-5 ②	27	8	Ⅲ	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1	
Q-5 ②	28	8	Ⅲ	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	芽1
Q-5 ②	29	8	Ⅲ	Araliaceae	ウコギ科	種子	1	
Q-5 ②	30	8	Ⅲ	Unknown charred material	不明炭化物		1	

森川6 遺跡の種実



3 森川6遺跡出土の昆虫遺体

〔出土状況〕 遺跡からは32点のコガネムシ科の昆虫遺体が回収できた。調査当初は積極的に回収していなかったが、頻繁に出土することから、畑の害虫であった可能性もあると考え、調査後半に積極的に回収したものである。調査区N-15とO-15にまたがる11mの範囲で精査したところ、9点の昆虫遺体が検出された。これは1.25m²に1点ある計算で、この割合で出土すると調査区全体では1400点以上があったことになり、出現頻度は高く、限られた種であるように見られた。

出土した昆虫遺体のほとんどが畑跡のあるⅢ層中か耕作土であるⅢ層とⅣ層の混土から検出された。1点のみがやや深いⅤa層中から見つかっているが、耕作等により移動したものとみられる。

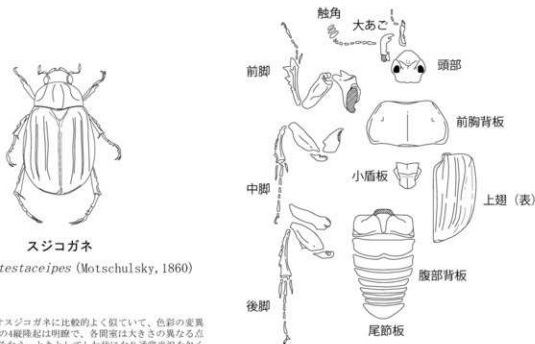
昆虫遺体は包含層掘削中に一部を破損して存在に気づくため、回収できたものは破片がほとんどで、多くは調査中に失ったものとみられる。また風化が進んでおり、乾燥すると褐色の薄い膜状になり、濡らすと本来の緑光沢が現れる状態であり、脚部、腹部、後翅などの細かい部位は確認できなかった。しかし、土圧で変形しているものの丁寧に土を取り除くと、頭部、前胸背板、上翅、小盾板などが並ぶ状況がみられ、本来はある程度形状をとどめて埋まっていたものとみられる。

これらの昆虫遺体はK_{0-d}降下時には土中であつたもので、17世紀前半のものと思われる。

〔同定〕 昆虫遺体同定を北海道開拓記念館の堀繁久学芸員に依頼した。その結果、頭部と胸部が揃っていた2サンプルがスジコガネと同定され、他は属名にとどまった。

現在の学名は、スジコガネ *Anomala testaceipes* (Motschulsky, 1860) で、草地で羽化脱出直後から摂食、交尾、卵巣成熟のため林地に移動し、林地から草地へは多数産卵した既交尾の成熟雌が産卵のため移動してくる。針葉樹の害虫とされ、幼虫は牧草などのイネ科草本の根なども食べる。

北海道では、もっとも広く生息している普通種のコガネムシなので、この種の出土はどこでもあり得るが、出現頻度が高かったのであれば、そこに産卵等で成虫が集まっていた可能性や、幼虫密度の高い発生地で、新成虫の羽化場所になっていた可能性があるかと教示いただいた。(土肥)



スジコガネ

Anomala testaceipes (Motschulsky, 1860)

15-20mm, オオスジコガネに比較的によく似ていて、色彩の変異が多い。上翅の4縦線は明確で、各間室は大きさの異なる点刻をやや密にそなえ、ときとしてわ状になり通常光沢を欠くが、まれにやや強い光沢を有する。琉球と小笠原を除く日本全土、朝鮮半島、中国北東部、パペーア東部

〔原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)〕 保育社1985より

オオセンチコガネ(コガネムシ科) 分解図と部位名称
(野尻湖昆虫グループ編1985図14を改変)

森川6 遺跡昆虫一覧

番号	グリッド	層位	種名	部位	備考
1	Q-4	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
2	O-13	Ⅲ	スジコガネ	頭部・前胸背板・上翅R・L	同定個体・図2
3	N-15	Ⅲ	Anomala属	上翅R・L	
4	H-17	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅	
5	S-12	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅片	
6	J-17	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
7	O-11	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅片	
8	M-6	缺間	Anomala属	前胸背板・上翅片	
9	O-11	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
10	O-15	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅片	
11	N-12	Ⅲ	Anomala属	頭部・上翅片	図3
12	M-13	Ⅲ	スジコガネ	頭部・前胸背板・上翅片	同定個体
13	N-15	Ⅲ	Anomala属	頭部・上翅片	
14	O-15	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅片	
15	H-17	Ⅲ	Anomala属	頭部・前胸背板・上翅片	
16	M-12	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
17	N-12	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
18	S-11	Ⅲ	Anomala属	頭部・上翅片	
19	M-6	Va	Anomala属	頭部・前胸背板・上翅片	
20	M-12	Ⅲ	Anomala属	頭部・上翅片	
21	M-18	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
22	M-18	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
23	P-13	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
24	N-15	Ⅲ	Anomala属	頭部・上翅片	
25	J-17	缺間	Anomala属	前胸背板・上翅片	
26	N-5	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
27	O-6	缺間	Anomala属	上翅片	
28	I-6	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
29	M-18	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅片	
30	N-6	Ⅲ	Anomala属	上翅片	
31	N-18	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅R・L	図4
32	O-16	Ⅲ	Anomala属	前胸背板・上翅片	



図1 昆虫遺体出土状況（現場）



図3 昆虫遺体・頭部



図2 スジコガネ



図4 Anomala属

VI まとめ

1 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかった。しかし少量ながら土器、石器が出土していることから、生業圏の一部であったことはいえる。出土遺物で特に少なかったものは剥片である。集落周辺から出土する剥片類は遺跡ごとの環境で廃棄のしかたが異なる可能性もあるが、この十余年、森町や八雲町で行われた大規模な発掘調査の結果では、住居址から約100m離れたと、遺物がほとんど無くなる傾向がみられる（森町上台1遺跡、八雲町野田生1遺跡・栄浜1遺跡）。本調査地点の遺物量も集落からいくぶん離れていることを示している。また、石斧・石斧破片が石器総数の18%を占める。これはこの地域が石斧を消耗する場所、つまり立ち木の伐採、荒加工などの作業が行われていた場所であった可能性がある。

2 森川6遺跡と森町の畑跡

本遺跡も含め、現時点で道内では19遺跡で畑跡が検出されている。これまでに見つかっている畑跡については、横山英介によって集成されている（横山2009）。

森町内では、これまでに4遺跡（鳥崎遺跡・上台2遺跡・森川3遺跡・森川5遺跡）から畑跡が見かっている。このうち1975年に国鉄函館本線複線化工事のため調査した鳥崎遺跡では、現海岸線から約30mの標高16mの海岸段丘上で畑跡が検出され、これが最も海に近いものである。

その他の3遺跡は、北海道縦貫自動車道建設に伴う調査で発見されたもので、海岸線から2～2.5km内陸の標高80～115mの台地上にある。3遺跡から検出された畑跡の総面積は2万㎡を越え、調査区外にさらに広がる模様である。これらの畑跡には以下のような特色が指摘できる。

時期 報告者により年代観にはやや見解の相違はあるが、いずれもK o - d 層下から検出され、B - T m 層を切っている。耕作土上の黒色土の堆積がほとんど確認できない状況から判断すると16世紀後半から17世紀前半にかけて耕作されたものとみてもよい。

森川6遺跡で耕作土から得られた炭化物を放射性炭素年代測定したところ、2点がB - T m 降下年代（10世紀中葉）に近いもので、もう1点は縄文時代晩期末という結果が得られた。分析試料は天地返しの影響を受けたものとみられる。

立地 畑跡が見つかった台地は鳥崎川と茅部中ノ川に挟まれ、内浦湾に向かって延びる。（図VI - 1参照）台地の中央を森川とその支流が南北に流れ、森川より東側は北～北東に緩やかに傾斜する斜面となり、西側は傾斜がやや強く、小さな沢が入る複雑な地形である。

上台2遺跡の畑跡は西側の森川の支流左岸台地上に位置し、森川の支流沿いや鳥崎川に入る沢沿いに広がっていた可能性がある。森川3遺跡・森川5遺跡の畑跡は、東側の森川右岸台地上に広がる。図IV - 1では、単調な斜面が森川沿いに市街まで続き、畑は海岸部から伸びてきたものかもしれない。

森川6遺跡は北東斜面、茅部中の川左岸に広がる台地の尾根付近にあり、調査区内で、畑の北側と西側の端部が検出されたことから、近くにある森川3遺跡・森川5遺跡とは別な単位をなすものと考えられる。地形から茅部中ノ川から緩やかに続く谷地形に沿って標高の低い方から広がる畑の上端付近であったとみられる。

作物 栽培されていた作物については今調査でもはっきりした結果は得られなかった。出土した植物遺体からは、林縁部のやや乾燥した畑地環境であったことが推測され、また、わずかではあるが、栽培植物を含むササゲ属も見つかっていることから、アズキやササゲなどが栽培されていた可能性もある。昆虫遺体の出土状況は、すくなくとも森林や笹原の環境ではないことを示すものであった。



図Ⅵ-1 森町内検出の畑跡



図VI-2 森川6遺跡付近の畑跡

耕作者 耕作者について、松本隆（1958）には次のような記載がある。

「この時代の生業は漁業を中心に置いていたため農耕は大体副業として営まれ、適地と思われる所を野焼耕土して無肥料で種下し、除草その他の管理も放漫にされ、収穫が漸減すればさらに新地を物色するという状態で、耕地の所有権なども確認されていなかったことは亀田奉行の示達によっても知られる。また、同奉行は遠隔の地に出張して耕作しているものは面而在所に帰って越冬するように申渡していることによっても察せられよう。中には海を越えて畑作を行い収穫が済んで根拠地に帰って来るものもあったらしい。甚しいのは対岸本土から海峡を渡って来て耕作したものもあった。これは後世の例ではあるが寛政十一年（1799）の谷元且「エゾ紀行」に「中川村（知内町中ノ川）にて土人（住人）のいう。三月ころより外国（道外）の人来りて耕作す、八月に至って故郷へ帰る。作物はひえあわり」と記している」

この文章には引用の元記録が記されておらず、前半にある近世における農業形態は記録から語られたものか、あるいは経験から語ったものかが不明である。

『森町史』（1980）などを参考にすると、16世紀末頃より砂原や鷺ノ木は鯨漁が盛んになり、和人の移入が増える。やがて、砂原は16世紀後半、鷺ノ木は17世紀前半に村となっている。また、鯨漁期である3月～7月にかけては多数の入稼ぎが集まり、その後も昆布漁を手伝っていたとみられ、1640年の寛永の大噴火前の春先から夏にかけ、この地域だけでも数百人規模の漁業者が生活していたとみられる。

当時主食である米の供給は、津軽・秋田・酒田あたりから自然に流れ込むもの、藩主が年々買い受ける幕府の収納米、商人が百姓から漁師へ仕送るものなどがあり、相当量の米が移入していたようだが、生産地が凶作ともなれば米価が高騰し次いで飢きんがおとずれるのは同じで、さらにこの地方特有の輸送の要素も加わり、常に安定しているわけではなかった。当然この地で消費される主食を補う適地作物も需要を生み、畑作につながったと推定され、その担い手も漁業者だったと考える。

のちの1715年「正徳5年松前志摩守蝦夷地風俗書上」中の「追而指出書付」にアイヌが和人地以北の野田追・長万部などや瀬田内以西で粟の農耕を行っていることを松前藩が幕府に報告していることや、翌1716年には藩はアイヌにも雑穀を植えさせていることから、17世紀前半期にアイヌが和人との混在地で耕作していたとは考えにくい。1717年（享保2年）の「松前エゾ記」には「松前西・東の地にて雑穀粟・ひえ・大豆・小豆・ごぼう・大根・瓜・なす・麻・たばこ総て畑物土地相応に出来申候もつとも所々畑作有之百姓勝手次第に作り取るよし」と記し、同書によれば、当時亀田村では馬糞大豆のみに畑租を課しており、畑作は自由であった。

畑の規模と埋没時の状況 森川6遺跡で検出された畑跡は約1,000㎡であるが、中には約5m四方の範囲に6列の畝間がある畑跡が確認されており、規模の差はあるものの、小単位の畑が場所を移りつつ重なった状況とみられる。これは地力が落ちれば次々と新地に移っていく状況を示すものかもしれない。K・O・d層直下のⅢ層面が平坦であったことから、畑が放棄されてから時間が経過していることと見られる。植物遺体の分析から畑作雑草であるアカザ属やイネ科などやや乾燥した場所を好む植物が多く見つかったことや、昆虫遺体の出現頻度が高いことから、1640年当時は草原であったことが推測される。上台2遺跡や森川5遺跡の植物珪酸体分析からチシマザサが繁茂する状況であったとされるが、これは耕作に際し森林を焼きはらい、やがて耕作放棄ののち森林が回復する過程の笹原の段階であったことが推測される。付近で見つかった2万㎡を越える畑跡は、当時、耕作されている部分は限られ、畑の周りには草地や、放棄後や時間が経過した笹原や林などが広がっていたものとみられる。（土肥研品）

引用・参考文献

- 山田秀三・佐々木利和 1988 『アイヌ語地名資料集成』
 松浦竹四郎 1988 『山川地理取調圖』草風館版
 松浦武四郎・秋葉 実 1988 『武四郎蝦夷地紀行 渡島日誌・西蝦夷日誌』
 森町史編集審議会 1980 『森町史』
 松本 隆・高倉新一郎 1958 『近世渡島地方史』
 小林露竹 1958 『北海道渡島国森町沿革史年表』 森町教育委員会
 森地方史研究会 1981 『森町の史跡と碑・石仏』
 松前町史編集室 1984 『松前町史 通説編第1巻 上』
 竹内理三 1987 『角川日本地名大辞典』I 北海道 上巻 地名編
 竹内理三 1987 『角川日本地名大辞典』I 北海道 下巻 総説・地誌編・資料編
 横山英介 2009 『考古学からみた北海道の焼畑－果してアイヌは焼畑を営んでいたか－』
 高倉新一郎編 1969 『日本庶民生活史料集成』 第四巻 三一書房
 千歳市 2010 『新千歳市史』 通史編 上巻
 高杉博章 2006 『蝦夷地の煙－森町森川5遺跡の事例から－』『東邦考古30』 東邦考古学研究会
 高杉博章 2009 『北海道森町の遺跡』『東邦考古33』 東邦考古学研究会

- 財北海道埋蔵文化財センター2001『八雲町榮浜1遺跡』北埋調報175
 財北海道埋蔵文化財センター2003『八雲町野田生1遺跡』北埋調報183
 財北海道埋蔵文化財センター2003『森町濁川左岸遺跡－B地区－』北埋調報190
 財北海道埋蔵文化財センター2004『森町濁川左岸遺跡－A地区－』北埋調報208
 財北海道埋蔵文化財センター2005『森町上台2遺跡』北埋調報216
 財北海道埋蔵文化財センター2005『森町上台1遺跡』北埋調報217
 財北海道埋蔵文化財センター2005『森町森川4遺跡』北埋調報218
 財北海道埋蔵文化財センター2005『森町森川3遺跡』北埋調報222
 財北海道埋蔵文化財センター2006『森町三次郎川右岸遺跡』北埋調報233
 財北海道埋蔵文化財センター2006『森町森川3遺跡(2)』北埋調報234
 財北海道埋蔵文化財センター2007『森町石倉1遺跡』北埋調報247
 財北海道埋蔵文化財センター2010『森町石倉1遺跡(2)』北埋調報266
 森町教育委員会編1975『鳥崎遺跡』佐藤忠雄ほか 森町文化財調査報告書 第1集
 森町教育委員会編2004『森川2遺跡』森町文化財調査報告書 第9集
 森町教育委員会編2007『森川5遺跡』森町文化財調査報告書 第12集
 森町教育委員会編2008『町内遺跡発掘調査事業報告書I』森町文化財調査報告書 第16集
 森町教育委員会編2009『町内遺跡発掘調査事業報告書II』森町文化財調査報告書 第17集

写 真 图 版





調査前の状況



表土除去開始



表土除去後の状況



発掘調査開始



調査状況遠景



畝状遺構検出状況



畝状遺構検出状況②地区



畝状遺構調査状況



包含層調査



畝状遺構③地区



④地区畝間検出状況



畝状遺構④地区



⑤地区表土除去



畝状遺構検出状況⑥地区



⑥地区西侧耕作痕



⑦地区畝状遺構



⑦地区测量写真



⑦地区耕作痕测量写真



基本土層断面



畝状遺構セクション（3ライン西側）



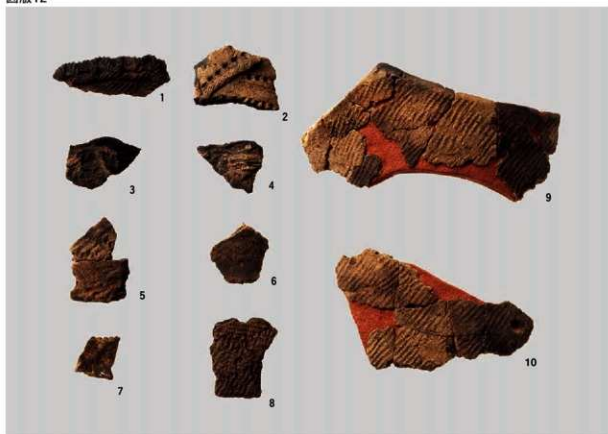
土器出土状況（縄文時代晩期）



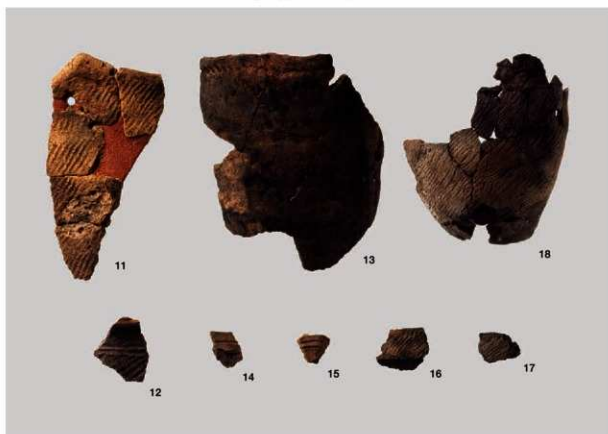
石斧出土状況



石皿出土状況



包含層出土の土器 1



包含層出土の土器 2



包含層出土の石器 1



包含層出土の石器 2



包含層出土の石器 3

報告書抄録

ふりがな	もりまち もりかわいせき							
書名	森町 森川遺跡							
副書名	森インター線交付金工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第277集							
編著者名	土肥研品							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター(http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 Tel.(011)386-3231							
発行年月日	平成23(西暦2011)年3月25日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりかわ いせき 森川6遺跡	ほっかいどうかわいせき 北海道茅部郡 もりまち 森町字森川 ちよう ぼんち 町302番地 -1・22・26 ほか 317番地-5他	01345	B-14-52	42° 5' 9"	140° 34' 32"	20100712 ~20101019	1,800㎡	道路建設 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
森川6遺跡	集落址	縄文時代中期				土器・石器		
		縄文時代後期				土器・石器		
		縄文時代晩期				土器・石器		
		近 世		畑跡				
要約	<p>遺跡は渡島半島の中央部にある森町の内浦湾に面する海岸線から約2.5km内陸の台地斜面に位置する。調査の結果縄文時代の遺構は無かったが、調査区を約2mの厚さで覆う胸ヶ岳火山灰d層(1640年降下)の下から約1000㎡の範囲で畑跡が検出された。畑の上面では畝立ての痕跡は崩れて平坦になっており、1640年時点では廃棄されてから時間が経過したものである。畑の時期は、耕作土上面には自然堆積層が見られないことから、16世紀末から17世紀前半とみられる。</p>							

財北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第277集

森 町

森川 6 遺跡

— 森インター線交付金工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発 行 平成23年（2011）年 3 月25日

編 集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地 1

TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238

<http://www.hokkaidou.mmd.ntt-east.co.jp/maizou>

印 刷 札幌大同印刷株式会社

〒004-0003 札幌市厚別区厚別東 3 条 2 丁目

TEL (011) 897-9711

FAX (011) 897-9715